纖維科學園

CHAIN

61.7

NO 8

目　次

表紙の言葉	4回生	片山　好彦	2
好況時と不況時		岩崎　眉庵	3
もの言わぬ人と，もの書かぬ人に	4回生	早川　和彦	4
北海道紀行		相宅　省吾	5
漢字廃止論に反対する	4回生	名取　和信	7
国語問題について	2回生	有松　利雄	9
JUST　MARRIED	研修生	長瀬　純子	12
気にしているのは俺一人かな	4回生	宮内　博一	13
「自動開閉」扉に思う	2回生	有松　利雄	15
「ルールを守ろう」		松本長代一	16
民主主義を育てるもの，個人	2回生	分部　行男	20
雑　感		内藤　謙一	24
心遣い	4回生	近藤　孝一	25
学生運動についての所感	4回生	早川　和彦	27
今迄のこと	研修生	長瀬　純子	30
ある男の話	4回生	西久保敬現	32
今はなき忠子を悼んで	4回生	川端　宗成	34
美しい質点	4回生	荒谷　善夫	36
スパーリン「地球上の生命の起源」	2回生	竹西壮一郎	39
三回生化学工学実験近況	3回生	寺田　英一	41
僕の昆虫記	1回生	竹村　一郎	42
現代日本の学生としての問題	1回生	井上　長三	44
「繊維展」をやろう	4回生	荒谷　善夫	47
無　題	1回生	斎藤　博	49
一冊のChainができるまで			51
編集後記			52

表紙の言葉

4回生　片山　好彦

6号，7号，8号と，表紙のデザインを書かしてもらった。
何故，連続して，引受けたか？　その動機といったようなものを述べてみよう。

私がこの大学に入学した頃，この"CHAIN"が，丁度，産声を発して，元気に誕生した。しかし半強制的に買わされるだけに，案外読まれず，本棚に積まれている場合が多かった。週間誌の方が，はるかによく読まれ，又内容も面白い。その点"CHAIN"は，くどくどして，表現もまずく，意味のはっきりしないのが多い。紙質も国宝級のザラ紙であり，表紙とくると，言語学的に言葉本来の使命である「意味の伝達」を忠実に守っている。読者にとって，これほどの難物はない。読破するには，努力がいる。そんなことは，教科書だけで沢山!!そして一直線に，本棚行きとなるのが，一般コースらしい。

如何に，面白く読ませるか？　週間誌ほどでなくても，せめて読者に「読んで見よう。」と前向きの姿勢にさせて見たい。勿論，週間誌の如き，興味本位で読ませるのでもなく，又"CHAIN"は　その為に生れて来たのでもない。だから，寄稿者にどうのこうのという筋合いはない。紙質の向上は，経済的に無理である。　残るは，言葉本来の使命を忠実に死守している，表紙である。そもそもこの"CHAIN"は，全集でもなければ，○○体系といった，格式張った書物でもない。"よみもの"であってよいはずだ。
そして　創刊号に統一して，右へならえ式にする必要はない。

表紙は人間でいえば，顔にあたる。顔が美しいか，美しくないかは，我々にとっては，大きな関心事である，美しくありたいと，願うのは，あながち女性の特権でもない。人間が，人間である故に，願い，祈り，悩み，苦しみ，喜こび。喜怒哀楽のセンター，人生の焦点が，顔である。

こんなに大切な顔，本で言えば，表紙を，なおざりにしておく手はない。
そして，かくなる結果となった。そろそろ表紙も，マンネリズムとなって，平凡な，類型的な顔に，なって来たのではないかと，心配である。
皆さんで，新風を吹き込み，個性のある美人に仕立てて下されば幸いである。その顔を変えられぬ人間の悲しさ，さゝやかなレジスタンスとして，本の顔だけでも，自由に，思うまゝに，変えてみようではないか。　オワリ。

好況時と不況時

岩崎　眉庵

最近の就職状況は大へん好調である。来年度卒業生の繊維化学々生は已に全員が一流一超一流会社に内定済みである、世間の求人ブームに加うるに先輩諸君が就職先で立派な成績をあげている結果であることは疑いなき事実である、本教室へ入って来る人はいづれも結局は就職と云うことが大きな眼目であることに間ちがいないと思われる。故に此好況はまことに御同慶の至りである。就職状況が良いと云うことは教育上にも好ましき事である、卒業后の就職をくよくよしなくても何とかなると云うことは諸子が全くのびのびした気持で学校生活が送れると云う事である。私は常々から本学々生は一回生のときは旧高等学校の心持ちで，そして4回生のときは旧大学院の気持で勉強してほしいと申して来た。就職状況がきゆうくつであると却々そうは云うもののその通りに行き難い、此点で戦后の学生は旧高校――帝大時代の学生に比べて大へん気の毒であると思っていた、所が最近の様子では其様な心配はいらぬ様になった、これはまことに嬉しい事の限りである。故に諸子はコセコセしないで大いにのびのびと勉強してほしい。但しのびのびと勉強すると云うことは怠けても宜しいと云うことでは決してない、むしろその反対でゆっくりした心持でやれるのだからみっちりと勉強せよと云うことである。世の中の我々の競争相手は孜々としてつとめている。一方就職景気が良いと云うのでウカウカと怠っていては忽ちひどい目に会う。

更にこゝでよく反省してほしい事がある、それは私共の観察によると好景気の年に卒業した人よりも不況のどん底に卒業した人が不思議にえらくなっている事である．昭和5－6年と云へば不況のどん底で各会社は現在の社員を如何にして首切らずに養って行けるかに汲々としていた年である．京大工業化学教室ですらも此年に卒業して直ちに就職した人は数へる程もない惨状であった、后年立派な業績で有名になった人々でも翌年或は翌々年になってやっと職を得たと云う有様であった。所が現在では其人達が一番成功している。それは不思議な様で決して不思議でないので，それはその様な不況時に就職した人は心からまじめに自分の仕事を大切にした為である。みじんも浮わついた心持になる事を許されなかった為である。心にゆるみが起りかけて

も転がなくて苦んだときのことを思出してたえず自ら相戒めよく不遇に耐へた為である。その心持が自然他人の眼にも反映して自ら社内上下の信頼を集めた為に他ならぬ。不況であった為に自然下積みの期間も長く従って其間に十分の修養と修練を積み得た為である。これと対蹠的なことが第一欧州大戦当時の卒業生について云へる，当時は我国化学工業が爆発的に発展した時で化学を修めた学生と云へば八方から引っ張りだこになる成金時代であった、昨日の貧書生忽ち技師長に納まって自動車を乗り回した時代である。いくらえらい人でもこれでは修養し実力をつける閑がない、其結果は当事者にとって非常な不幸であった，当時の人で終りを完うした先輩は存外に少ない様である。

もの言わぬ人と，もの書かぬ人に

4回生　早川和彦

世の中を冷笑して生きて行くのをモットーとしているためか，人一倍感受性が鋭く，傷つきやすいためか、羞恥心の意外に強いためか，己以外に考えている事を知らせるのをいやがる人がかなり多い。しかし自分自身の世界観と言おうか人生感及び，それの具体的な表れである日常のさまざまな出来事に対するものの考え方をなぜ頑固に守らなければならないのであろうか。
我々青年の人生観即ち生命力は他人に少しのぞかれただけで蒸発して無くなってしまう様なけちなものではないはずである。むしろ他人に与えれば与える程後から後から湧き出して来るものであろう。他人にも語り，他人から聞いて巾広い奥のふかい考え方を若い間に、自由の溢れる学生々活の間に、得る事は絶対に必要である。又、我々は一日の三分の一程を同じ場で過ごしている。この様な環境にあっては他人に何の気がねもなしに話しかけられ得るはずである。この時，自分の人生観ー生命力ーを相手に頭からかぶせ，同時に相手の生命力を一滴残らず吸い取る位の気力を持って，向い合いたいものである。我々の周囲には、己の考えをぶっつけ合うに値する友人がたくさんいる。それを探さずして己の殻にとじこもり、己を高地ないしは辺地においこんで盆栽の松の様にちょっと見ただけでは結構な形をしているにもかかわらず融通のきかぬ、これ以上伸びる可能性の無い人間になる事程、無意味で、哀れな事はないだろう。

北海道紀行

相宅省吾

蟹工船

久しぶりに函館の町に帰って来た。古い町並と明るい景色は新開地の北海道では特異な存在である事を知った。

久々に

翌早朝港に出た。大漁の旗は一面にかかげられ海は活況を呈していた。沖には日本水産の蟹工船が吉の雄姿を朝もやの中に浮べていて，迎へのランチが出た手に手に大漁としるした小旗をもって，汽をけって進んだ。

真白い防疫船が，真先についた。スルスルと梯子が下された。甲板には数ケ月振りで故郷に帰る作業員の一刻もはやくと云う様な顔が並んでいた。検疫が終ると国平船が横づけられ，どんどん荷物が降されていく。船員に先導されて，我々はタラップを登って行った。船の中は幾段にも分れてあり，一つの大きい工場であった。作業員の室も丁度峰の巣に並んだベッドであった。小林多喜二の小説「蟹工船」にある様な暗いかげはなかった。　しかし、数ケ月の北洋の白夜の中で行なわれたはげしい労働を終え、やっと故郷の港につき，飛び立つ鳥の様に去ってしまった。数百人も生活していた大きい船室内には廃屋の空しさが玄がっていた。

缶詰工場、ボイラー室、エンジン室、それに莫大なる漁網類，ロープ類、のうず高い山があった。整然と整理はされているが，数ケ月に渉るはげしい使用とに損耗と臭気が立ちこめていた。

やっと仕事を終え，船長，漁労長や日本水産の人達と、美しい船室で色々の事を話した。

人々はナイロン網の成功以来新しい資材に対する関心と要求は切実であった。私は内地における合成繊維、プラスチックスに関する現状を説明した。北の海の男達と仕事の事について話し合っている内に、私の胸には過ぎ去った青春の海軍時代がよみがえった。そして、色々実際の仕事にたずさわっている人の切実な要求を聞いている内に，種々の新しい着想があった。そして，新しい資材，新しい器具こそ北洋を守る道である事を確信した。

資材，器具の発達

北洋漁業の特徴は、沿岸漁業と異り母船（之は主として缶詰材料及び資材をもった一つの浮べる大工場である）と数隻の独航船（主として漁獲にたずさわる）とより成っている。此の母船式独航船の一隻当りの漁獲量は，戦前カムチャッカ沿岸の漁群の濃密な所で操業して、平均五万五千匹であった。それが戦後，魚群探知機を備えた大型漁船で北洋再開の昭和二十七年で，一隻当り三万七千匹にすぎなかったのが，昭和二十八年ナイロン漁網があらわれ、一挙に七万三千匹に飛躍した。今迄のラミー漁網では、漁期の終り頃になるとボロボロになって，修理に手間取り，豊かな漁群を眼の前に見てみすみす逃す事がしばしばであった。

これに反し，ナイロン網は軽く、網さばきがよく，耐久力もよく三漁期はもつ。それ故、価格は高いが，一匹の鮭当りラミー漁網では六十四円かかるが、ナイロン漁網ではわずかその1/5，十三円にしかつかない。時にこれが革命的と云えずに何であろうか。

漁具の変革はそばかりではない。例えば，今迄桐の木で作られている浮子（アバ）は塩化ビニルの発泡体に完全に変り、独航船は木製より鋼鉄製にレーダーを備え，魚群探知機がつき，更に夜間も操業可能にする発振ブイ（ラジオブイ）が備えられる事となった。

新漁場の開拓

今は北海道経済の支柱であった北洋漁業は、年々その転換をよぎなくされている。かつては帝国海軍に守られて出漁した栄光は消えた。これと共に、小林多喜二名作の蟹工船の労働者の搾取も改められた，そして北海道々民の経済を困難にしているのは、皮肉なことにはソ連の年毎の北洋漁業の圧迫の強化である。この為生きて行く為新しい漁場の開拓に夢を託さねばならなかった。新しい漁場には，新しい資材、漁法の開発が必須な条件である事は論をまたない。

新しい漁場にはオリユートル海域があった。アリーシャン群島の北、ベーリング海峡の近くである。波は荒く，霧は深く，海底は凹凸はげしく，今迄の漁法では成功しなかった。しかし，ここには畳一枚にも及ぶヒラメ（オヒーヨ）や北海道の沿岸より消えた鰊が無数にいるとの事であった。之にはハエ縄漁法が適当である事を知らされた。此の縄製作に函館より帰り、庄々木さん達と京都で色々な縄の試作を行った。

翌年の春数種の試作品を積んで北洋の開拓船団は出発して行った。その中に我々の作ったロープの一種が最適であった。それはポリエチレンを主体とするものであった。更に翌年（今年）本格的な製造は始まった。

今年の四月東京の学会を終て一年ぶりに再び津軽海峡を越えた。東京は、桜花が咲き乱れていたが，函館は吹雪であった。

工場は新しい合繊ロープの製作に，特に戦場の様であった。そして技術者は、自分で研究し，自分で製作したロープをもって、新しいポリプロピレンなど幾多の試作品をたずさえてその結果をみとどけるため、

新婚一ケ月の新妻を残して流氷のうかぶ極光（オーロラ）の輝く極北の海に船出していった。

私は北海道最古の町、江差松前を見物し五丁沢温泉にとまり、飛行機で東京に帰った。

漢字廃止論に反対する

4回生　名取　和信

前号、市村君の漢字を片かなになおすとノートが早くとれるという理由で漢字をやめようと云っておられたが，これは漢字廃止理由としてはいさゝか薄弱である。ノートを早くとるためには、速記術が最も早く書けることは言うまでもないが，彼の考え方は簡略速記の考えに他ならないのである。

私達は，ノートをとる場合，一言一句までそのまゝ写すだろうか。それでは先生の言葉が早いためにノートに空白が出来るのは当然である。しかしたいていの人は略号を使用している。しばしば出て来る文字に略号をあてはめて能率を高めている。これは後で自分で

例えば「溶液」などという言葉は最もよく出てくるが，これをそのまゝ書く人はまあいないだろう．㊟，シシ，Ⓢ，solu，　その他何でもよい。自分だけがわかる略号であればよいのである。

市村君のカナ書きもこれと同じ考えであろう。後で自分で見てわかればよいのである。　以上の様にノートを早くとることと，漢字を廃止することの間は未だ開いている。さてここで漢字が必要であるということについて私の考えをのべて見たいと思う。

前号市村君のカナ書きがいかに読みやすく、それでいて内容を理解するのに努力が必要であったかは言うまでもない。これはなぜか。カナはそれでひとつの音を表わしているから，読む場合に非常に楽になるのは当然である。くしかしカタカナは慣れていないせいもあって，かなり読みづらいものであ

る）これはいわば，英語，独乙語などの発音記号と似たところがある，読むのはだれでも読めるのである。

しかしカナを読む場合に，理解するのに努力がいるとはどうしたわけか。これは私達漢字をならって来たものにとっては、漢字をみれば発音しなくもその意味がわかる。あたかも英単語の，意味は知っているが，読めない様なものである．しかしカナで書かれていれば、それを頭の中で一度漢字になおしてその意味をつかむといった手順で意味を知るのである。そのとき漢字をあてはめそこなうと，異った意味にとられる。日本語には同音異義語が多いことで致命的である。意味のとり違えがあるかも知れぬ場合には、これは文字として通用しない。文字はそれを読む全ての人が書いた人の考えを知りうるものでなければならないからである。

それならば，小学校で漢字を教えずにカナばかりで通せばよいといわれるかも知れない。それには同音異義語が致命的である.漢字ひとつについて意味を知るのでないから，全ての語を覚えてそれに種々の意味をつけなければならない。これは英単語を覚えるより困難な仕事である。英語は単語をひと目見てその語の意味をつかむことが出来る。しかし漢字をカナになおしてそれを覚えるには、ひと目見て意味をとるには余りにも多すぎる同音異義語が存在する．漢字はおぼえにくいと云われるが，新聞によれば小学一年生に小学校で習う全ての漢字を教えこむ（当然意味も理解させる）ことを可能にした先生のことが出こいたのは，未だ記憶にある．

英語、独乙語などで分ち書きが行きとどいていると云われるが，あれは分ち書きではない。単語ひとつが意味をもっていて，その組み合わせを一目見ただけでその意味がわかる様になっているのである。分けて書かれたのではなく，意味を持つ単語をならべたものである。

従って，事務能率をあげるためのカナ書きは良い。しかしそれはあくまで漢字あっての カナ書きであることを忘れてはならない。

◇

「何故　私は移ろい易いのですか，ジュピターよ」
と美（ヴィーナス）が尋ねた。
「移ろい易いものだけを美しくしたのだ」
と神（ジュピター）は答えた。

（三回生）

国語問題について

2回生　有松　利雄

最近国語問題について色々論議されているようであるが，ここにはなはだ抽象的ではあるが，僕の考えを述べてみよう。

I．日本語習得の際，或は一般的な使用の際についての問題

日本語いや言葉というものは，それ自体目的ではなく，色々な目的へ向かう為の手段であると思う。生れながらにして，直ちに日本語が話せるというような日本語であれば一番良い。勿論その日本語は，いわゆる難かしいこと，高遠な真理に及ぶことまでも充分表現できるものである。しかしこれは不可能である。それは，このことが言葉だけの問題ではなく　人間の知能の問題をも含んでいることだ。又純粋に言葉だけの問題にしたところで，うまれたての赤ん坊に，その知能程度（言葉に表現する知能ではなく，物事を考える知能）のことを言葉で云い表わせといってもむりである。そこで我々は言葉を習得しようとする。その時，最も容易に、最も速く，最も完全に習得できる程良い。即ち知能程度に応じて、それに遅れをとらないように言葉も習得して行く。その時苦労がない程良いというのである。そうである為には，言葉というものは簡単であるべきである。（Systemが簡単なのである）　機械などでも、複雑なもの程故障が多く，その構造の簡単なもの程，操作の簡単なもの程良く使われる。言葉が簡単であれば，習得の際だけでなく，一般に使用する際も容易になる。読むに易く書くに易いということである。（易しいということは，単に意味を表わすのに易しいというだけではない。例えば一語が一行にも渡る程長くてはお話にならない。いわば形の上からも易しいということである。）　つまり言い表わすのに又は聞きとるのに容易に，手間どらずにしかも充分にできる言葉であってほしい。ここで、日本語がそんなに易しくなったのでは、それを通じての思考力を養うことができないという人もいるかも知れない。これは次のように解決すれば良い。日本語の習得が容易になれば，学校での国語の時間（日本語習得の為の）はずっと少くなるだろう。それによって空いた時間に，日本、中国の古典、難かしい外国語，或は現在までの日本語を思考力を養うと

いう意味に於てやればよい。そういう意味での思考力を養うのにもっと良い方法があれば更に良い。

Ⅱ. いわゆる文学者が使用する場合の問題

日本語が美しい言葉であってほしいのは、文学者ならずとも同様であろう。その美しさを二つにわけてみると、

(1) その語（或は言葉）であらわすところのものが美しい場合
(2) 語調の美しさ

になる。先ず(1)の場合は、先に述べたように、語（或は言葉）の表わすところのものを、簡単に、容易に、しかも明瞭に読みとれるような、又はそう表わせるような日本語であれば、必然的に可能となる。(2)の場合は、文学者のやっているような難かしいところまで行かなくとも、発音しにくいもの、聞きとりにくいものは避けるべきであろう。（ここに、漢字を仮名にかえた場合の同音異義についての問題もある）

Ⅲ. 事務機などに使用される言葉（日本語）について

今の日本語は確かに不便である。例えば、キーパンチャーなどを必要としているのが、その証拠である。事務機の能率を上げたところで、もっと極端に言えば事務機のところで要する時間を0と考えた場合でも、事務機に要する時間よりキーパンチャーで要する時間が、はるかに長ければ、全体としては殆ど能率は上ったことにはならない。キーパンチャーを人から機械にかえればよいが、それには、現在の日本語が余りにも複雑すぎるのではないだろうか。（外国では、そういう機械を考案中だと聞くが） 又英文タイプライター程にも邦文タイプライターが普及しないのも、今の日本語が複雑すぎており（理想的な言葉には、ほど遠い）、そういう点では、英語などの外国語よりも劣っていることの証拠であろう。事務機などで打ち出す字、速記できる字が、そのまま日本語となっているとしたら何とよいことであろうか。

将来の日本語への希望は色々ある。勿論全部を完全に満足することは、いやその内の一つでさえ完全にということはできない。最大公約数的にまとまるものであろう。こういう希望をもとにして、漢字をなくそうとか、ローマ字にしようとかの具体案がでるのだろうが、単に漢字をなくしただけでは、或はローマ字にしただけでは解決されない。（漢字をなくそうとか、ローマ字にしようとかいう人は、理想的な日本語をつくる際の一段階としてそれを主張するのであろうが） 世の中が刻々かわる現在、それぞれの要求に応じて言葉（日本語）は移り変って行かねばならない。実際いつの時代でも言葉

は次々に変化している。ただ、今の日本語では、そういう末端のものでなく、根本的な改革が要求されるのである。

現在の日本語は、表音文字と表意文字がうまく混合されている。これは、意味を受けとる側（読む側）では、割に便利も良いかもしれぬが、いざ書く時は、なかなか不便である。（文学者などは便利がよいというかもしれぬが）又辞書などに於ても、英語の辞書、国語辞典などに比べて、漢和辞典のひきにくいこと。こう現在の日本語にばかりけちをつけると「今の日本語があってこそ、このような立派な文化が生れたのである」という人があるかもしれない。これを分析してみると、次の二つになる。

(1) この日本語が今までの時代に最も適していたからこそ、このような立派な文化が生れた。

(2) 最も適していたとは言い難いが、とにかくこれだけ立派な文化をつくりだした。

(1)の場合、本当に最適だったかどうかは別としても、今までの時代に最も適していたという理由から、諸条件の変った現在（或は将来）には最も適するというわけにはゆかない。(2)の場合には、もっと良い日本語があれば、もっと良い文化がつくり出せたはずである。従っていずれの場合も、今の日本語を研究し、より良き方向へと変えてゆかねばならない。

「漢字をなくそうとかローマ字にしようとかいって悪あがきしても何にもなるものか」などと言わずに、この具体的な論を更に発展させて、より良き日本語へと向いたいものだ。それにはやはりこの方面のことを専門的にやっている国語学者の人達に主にやってもらわねばならない。難かしい問題だろうが途中で放棄したりせず、良い日本語を作ってほしい。そして僕達は協力すべきは勿論だが、後からハッパをかけるような気持でありたい。

※ はなはだ拙文で申訳ない。これは日本語が悪いのか、拙者の頭が悪いのか。

※ 「カンジをなくそう」を原紙の校正の時読ませていただいた。校正の時のスピードは、他のものより相当速くできた。イチムラが本当のにイキムラが正しいと思っていたのは仮名であるせいか。根本的には漢字にたよって、発音を大切にしないせいであろうが。

JUST MARRIED

研修生　長瀬純子

カシコミ　カシコミテ申スー。　こうしたノリトのうちに二人は結ばれて三三九度のサカズキで――。　どなたとどなたですって。いえいえ今はそんな事は気になさらないでいゝのです。ちょっとした裏話をいたしましょう。箱から出したての様にまだ折目の見受けられるモーニングを硬苦しく着た新郎、ツノカクシで半分程は見えなくなった白い顔、首、手までもそして重そうにウチカケを着せられた新婦、二人は神の前で緊張しきっています。そして両側にはこれまた面と向い合って真上にこれから集団見合いでもはじまるかの如く何とも云えない顔をした家族、親族の列（仲人夫婦）そして白い衣を着た神主と、白い着物に赤いハカマの姿をしている私。以上が結婚式場の all staff，私は実に変ったこんなバイトを、まあ人生の大きな峠の茶店に住いするおばあさんの様な役目をもう十何回となくやりました。

最初に短いノリト、式場及びそこにいる人間全部のオハライ、神前へそなえ物を出し、ざっとおぜんの揃った所で　長いノリト、次に climax！三三九度の盃を新郎新婦と仲人夫婦と両家の上席二人に。誓の詞、新郎新婦が神前へタマグシをそなえ、両家の祝いの盃。以上で40分程の式は終りました。Just married という訳なのです。ＣＨＡＩＮをごらんになる皆さんはまだあまりこの舞台にお立ちになった方がないと思います。

そしてこういう精神的に非常な緊張を度々味合う私はまたとない人生経験とまんざらでもない思持ちでおります、縁結びの助手ですからね。

皆様のお役に立てばと思っております。いやそれどころではありません。いざ自分が主役になった時の事を思うといやですが。

最後にちょっとした面白い人間の心理を発見しましたので一言。

式の過程の最後両家の祝盃の時，全員につぎ終る迄待っててもらう様にこちらがあらかじめ言っておくのに，ついでいく内に必ず杯を一度は口の近くまで運ぶのですね、そしてひどい時には先に一人で一杯やってしまう人もあるのですね、それが本人は隣の人がついでもらっている時までわかっていて。あゝやっぱり口から先に生れて来た表われでしょうか――。いやはやこんな所にまでそう普段のクセを出さなくてもね。

気にしているのは俺一人かな

4回生
宮内　博一

今は昔、男ありけり。年はハタチをフタツ、ミツすぎたるさまなり。みてくれも余り悪くはない，けれど，そんなに女にもてててもてて仕様がないというほどでもない。とに角、浪人したとはいえ二十倍の競争率をくぐり抜けたんだから，頭も悪くはない。しかし，ストレートで志望大学へ入れなかったんだから，良いとはいえない。とても歴史に残るような悪いことも出来ない代りに，大手を振って極楽へ行けるとは思っていない。いってみれば，平凡な、どこにでも居るような男である。であるから，君は，自分のことを読むつもりで，続けたまえ。

そう、彼がこの大学に入学したのは，もう三年も前のことになるんだな。ほんとうに長かった浪人の一年間が終って，二期とはいえ，ブラ下ることが出来て，どうやら面目も立った。学校の内容は全然知らないけれど，新たに希望が湧いてくるから不思議なもんだ。女の子が少いのは一寸気にくわんけど，まあ，研究に精進するのには，気が散らんでえゝやろう。ひとつこれから四年間，思いきり勉強してみたろかな．などと，本気で考えとった。

やっぱり，生れ付いての怠けものには，四年はおろか，一月も続けて勉強することは無理やったな。前期の試験も終って，動くのがいやになるような暑さも少しはましになったし，そろそろ皆とも気軽に話しが出来る。というので，東山を散策したり（勿論南禅寺で一杯ひっかけて），仮装行列の準備が終って，ウイスキーでコンパをしたり。遅くなって乗った電車の中で，もうろうとしながら，皆えゝ奴ばっかりやなあ。

後期の試験も無事（?）に終了。旅行に行った，少しばかり解放感を味って，同伴者とは大いに親密度を増した。とかく，一緒に女の子なんかをひやかした、というのは，特別に親しみを持つようになるものですな。

「昨日なあ，帰りの電車の中で、えゝやつおったぜ。」「そんでなんとかしたんか。」「それがな，なんともならなんだわ。」てなことが，話題の中でだんだん大きな比重を占めるようになる。一寸だけシャーな女の子がいるビヤ

ホールに一緒に行ってやったり、阿呆らして聞いてられへんようなノロケを真面目に聞いたり、とにかく愉快な学生々活を満喫した。

三回生になった。講座回りの実験をしながら，研究室の間がしっくり行かないらしいのを知ってくると，我々の時代からは，研究室間の交流を活発にしよう、等と話しあったり，安保斗争のときには、学校側のだらしの大きさに胸の底から怒りを爆発させた。彼は若かった。自分は云うにおよばず，他人の純粋さも信じて疑わなかった。

二週間程前に、就職の決まった彼に会ったが，どうも浮かん顔をしている。いいかげん兎角が出来た筈やのに，又誰かに振られてしょげとるな、と思ったが，今度のはもう一寸深刻そうだ。気になるから彼のいい分を聞いてやった。

「やっぱり私はお人良しでした。研究室の撰択と、就職のことでいやというほどそれを知らされた。それまで一緒に仲よくやって来たのに，あの研究室は、雰囲気が悪い，あんな奴らが集まった所へ行ったら勉強なんかでけへん。というようなことを陰でいい出されたとき，今まで俺等のクラスはよう団結してると思うてたからよけガックリとなったわ。そやけど，そらまだええわ、どこの室へ行ってもあんまり変らへんからなあ。完全に参ったんは今度の就職のことや。就職いうたら一生の問題や、誰かて真剣に考えるのは分るで。そやけど、俺が考えたら，募集に来た会社やったら，どこでも一流と違うか、俺ら、誰のお陰か知らんけど有難いことやと思うてるで。それがや。ゴチャゴチャもめて，気分が悪いことばっかりや。お前あんなこと見てて腹立てへんか。大会社やないと心配や、いうような奴がどこへ行ってもあくはづないわ。オレはコネやから、なんて得意そうな顔しとるやろ．コネや、いうことは，実力とはちがいます．いうことやないんか。もう行く奴が決まったとこへ、二人でいって，一人帰されたなんて、そこへ行きたいんやったらなんで始めから希望せえへんねん。人のことやいって知らん顔してられへんような気持や。」こいつ大分カッーと来とるな。いつまでも子供じみた理想主義にとりつかれて進歩（退歩）のない奴やなあ。「それで、お前は就職は大会社と違うんか。」「俺は一人だけしか行く人がないとこ撰んだよ。」ふーん。こいつかて競争相手が出て来たらどうなるか分るもんか。だけど、兎に角、彼の言うことには一理も二理もある。

「これだけ粒のそろた会社を前にしてやで，どうしてもあそこやないとい

やや、なんて、どんな根拠でいいよんねやろ。どこの会社へ入ったら二十年後にどうなるか、そんなにはっきり分るんやったら会社なんかに勤めんと占師になった方が大物になるで。」

これは大分メーターが上って来たな。そろそろ立たんと終電に乗り遅れるわ。

「お前はな、一人だけでどうということもなかったから、そんなえらそうなこと云えるけど、お前は現実の認識が甘いんと違うか、もっと聞いたりたけど遅なるからもう帰るわ。さいなら。」

「おい、こんな大事なこと話してるのにお前は途中で逃るんか、現実現実いうけど、実在するもの、必ず実在すべきものとは限らんやないか。こら、帰って来いよ。……」

明日になれば、又聞いたるから、追いかけてこない内に早う、電車に乗ってしまお。

「自動開閉」扉に思う

2回生　有松利雄

電車に乗ると、よく扉に「自動開閉」とかいている。これを見ていつも思うのだが、この扉の開閉は車掌なり、誰なりが、スイッチを押しているのであって、何も止まると扉が自動的に開き、動き出すと自動的に閉まるのではないのだと。手動扉とは違う。だがそれは、動力源が代っただけである。直接人間の力で扉の開閉をするのと、人間の力ではもっと楽なスイッチを押すだけで、実際に扉の開閉を行うのは、他の動力源であるのと。このスイッチを押すやり方は半自動であって、やはり自動といえば、停留所に止まると自動的に開き、動き出すと自動的に閉まるのであってほしい。実際にも、固定した建物（店など）などの出入口にはこの自動的なのがあるようだが、この半自動と自動の違いは、いわば、電気……と電子……との違いのようなものであろうか。ものを動かすのに、スイッチを介して他の動力源を導入したことは大きい。だが今に、スイッチによって開閉する扉を「自動開閉」扉なんてよんでいると笑われるような時代がこぬとも限らぬ。

ルールを守ろう

松本岳代一

現代の世の中でルールがなければそれこそ大混乱を来たすだろう。ルールは社会生活を営む者にとって常識的存在である。そして，それを守らなければ無いも同然である．しかし，しかしである。これらのルールがややもすれば守られないのは何故か。そこには人間の意志の弱さが存在するのではないのだろうか。ルールを堅苦しいものであると考える人の如何に多いことか．そのような人　　、ルールを守らない人なのであり，エゴイストなのである。このような人が連鎖反応を起せばどんなことになるか．ヒを見るより明らかである。そりやルールというものは人の作ったものだから，人によっては気に入らないのもあるだろうが，現代人なら当然合理的に作られているだろうルールを守らないというのは甚だいけない事である。

世の中には人々が生活をするために色々なルールが決められており，その中で人々は自由に活動している。国際法あり，憲法あり，その他数多くの法律や規則がある。大学には大学内の規程というものがある。一方，スポーツにしても勝負事にしても人と人とが競う場合にもそれぞれルールがあってその中で活動するのである。チャンバラ華やかなその昔ですら―― その善悪は別として―― ヤクザにもヤクザなりの仁義という一種のルールが存在していたではないか。ルールは社会生活上に必須なものである。

若い諸君らも愛するように私も大いにスポーツを愛好する。その理由の一つに決められたルールによってゲームを進めて行くという楽しさがある。ルールのないゲームなんて凡そナンセンスである。スポーツマンの中にはこれを堅固しいと思う人はいないだろう。それなのに，身近な学内においてすら常識的ルール―― それはもうエチケットと呼ばれるべきものだが―― が守られていない。否、守ろうという意志はあってもそれを言動に表わせない人の多いのには驚く。もっとも些細な事だと，放っておいても他に直接迷惑をかけない場合もあるのだからどうでもよいように思われ勝であるが，どうしてどうして決してそうではないのである。既にそれに気付いた人ならばそのようなことはしないはずである。それで私は気付かない人のために，またそう

いう事を知らない人のために敢えてこの貴重な紙面を拝借して，若干の苦言を述べさせてもらう。

何万人もの罹災者を出す大火事も僅か1本のマッチから始まったという実例がある。どんな些細な事でも頑そかに出来ようはずがない。諸兄姉は化学を専攻しているのだから危険物を取扱う機会が多い。ここでいう危険物とは消防法第2条で規制せられた，いわゆる火災の危険性を持つ薬品を指す。さて諸兄姉らの中の殆んど大半の人はこの大学へ入って始めて化学実験をしたに違いない。その薬品の取扱い方の無暴な事には唖然とする。揮発性・引火性薬品をビーカーに入れ，蓋もせずに薬品庫から運ぼうとしたり，ビーカーになみなみと入れた濃硫酸を持って階段を昇って行く姿を見かける。正に学内のダンプカーとでも云いたい。衝突でもしたら多分その本人よりも他人の方への被害が大きいだろう。こんな事を云っているが，今まで大して事故もなかったじゃないかと云われるだろうが，歴史の浅い，人数の少い本学科にそうこうこの種の事故があってはたまらない。しかし今後そのような危険性を少しでもなくするためにはお互にルール―― ルールというよりも化学者の常識―― を守ろうではないか。

薬品の事について序に述べておこう。薬品廃液を流す時にはその性質と共にその経路を確めてから捨てねばならないと云うルールを知っているだろうか。特に2階で実験をする人々に注意してもらいたい事は，その階下―― 大抵の排水管は階下へ真直に降りて来ている―― の人々および器械類に迷惑をかけないようにしてほしいという事である。例えばキップの装置の廃液を流し，階下にそのガスが拡がった場合に，階下の人は貴重な装置―― 鉄や銅などは硫化物となって大抵黒ずんでしまうと云う事は分析化学を学んだ者なら誰でも知っているだろう―― を持って避難しなければならない。しかし，大きな固定された機械類はそうはいかない。このような時に，一寸した2階の実験者の機転によって大切な器械類は助かり，階下の人々にも迷惑をかけなくてすむのである。化学者としてのルールを守ろう。

次にくわえ煙草について述べる。まさか諸君の中には煙を吐かなければ歩けない，いわば国鉄のローカル線並みの人はいないだろう。それなのに化学実験室の廊下を，実験室内をくわえ煙草のまま悠々と歩いている人をよく見かける。諸君の中に私にその注意をされた人は大勢いるだろう。過日，四日市にある合成ゴムの工場を見学に行ったが，その正門にデカデカと書かれた「場内へのマッチ・ライター等の持ち込み厳禁」という看板を見てやや不審気に思った人が多かった。しかし案内者の説明にあった「万一という言葉の

万分の一という事も許されない」という言になるほどと分ったらしい。ここだけに限らず石油の製油所・石油化学の工場・レーヨン工場など化学工場の大抵の所は場内禁煙を励行している。煙草を吸いたければ喫煙所で吸えばよいようになっている。学校の化学実験室だって危険物薬品を取扱う事に関しては化学工場と一寸も変らない。場合によってはそれらの工場よりも危険なことさえある。諸君、化学者としてのルールを守ろうではないか。

さてその次は下駄履きの事である。諸君らの中で学内規定によって校舎内での下駄履きを禁じられているという事を知っている人は恐らく少いだろう。このようなルールが何のためにあるのか。それは授業への騒音防止であり，また最高学府の学生としての身だしなみである。ある親しい部外者から以前にこんな事を云われてその返答に困った事がある。「お宅の学校では下駄を履いていてもよいのですか。あれは見苦しいですね。まさか工員じゃあるまいし、実際みっともないですよ。」と。弥未卒先して下駄履き学生の摘発に乗り出した。特に、最近の技術者ブームによっていずれは誰かがお世話になるであろう。会社のお歴々が頻々として研究室へ現われるようになったが，これらの人の目的の一つに大学の実状・雰囲気・学生気質などといったようなものの探索がある。それなのにガラガラ下駄履きで廊下を闊歩していたのではいやはやもう何ともだらしがないですねえという事になる。下駄履き賛成者には、耐薬品性を考えてとか，水虫のためとか色々な言訳けがあるだろうが，何も下駄でなくてももっとよい手頃なものがあるではないか。諸君，紳士淑女としてのルールを守ろうではないか。

ところで学生間で取り決められたルールすら守られない例をとりあげてみよう。その実例に体育祭があり，文化祭がある。最近のそれらの催しの低調な事といったらお話にならない。極く一部の人達の趣味でそれらが開かれているという感がある。これは一体何に原因するのか。色々な原因があげられようが，要は一人一人が決められたルール――貴重な講義時間を削いで開かれる催しに参加するというルール――を守らないからではないか。また，この前の追い出しコンパの時にもルールを無視したエゴイストが若干あったという事を聞いた。（各クラス委員の間で取り決められた――というよりは伝統的になっているが――ルール――明白に掲示され衆知のはずのルール――を無視し，上級生の卒業を祝福出来ない，そして未だにその態度を改めようとしない一部のグループがいるという事はこの輝やかしい繊維化学科のために何と嘆かわしい事か。それにも増してその反動なのか、新入生歓迎コンパに上級生の欠席多数云々の記事を読み，その思慮の浅はかさに哀れを感じた。

これは明らかにその開催についての不徹底とクラス委員を無視した一人よがりのルールの取り決めとによる主催者側の大きなミスであると思う。諸君の反省をうながす。ルールに従ってルールを作ろう。そして，決められたルールは必らず守ろう。

さて，最後に気付いた雑多の事柄を書き並らべてみる，まず挨拶である。われわれのような少人数の所では朝夕の挨拶ぐらい何も面倒臭くもないと思うが，如何なものだろう。それによってお互に一層の親しみが湧いて来たならこんなに簡単な事はないだろう。これもルールというより紳士淑女としてのエチケットである。次に水洗便所である。ここにはルールなんてないように思われるが，君はその正しい使用法を知っていますか。どこかの代議士ですらホテルのWCの使用法を間違えたという話を聞くのだからね。知らない人のために教えよう。まず使用前后に必ず水を流すこと。所定のペーパーを使うこと。ただこれだけ。3番目に配電盤のスイッチの切り方である。これにも簡単なルールがある。入れる時には大きい方から順次小さい方へ，切る時にはその逆を。そして必ず右手で行う，何故なら心臓は左にあるから。その次は，部屋の出入りについてである。他人の部屋へは必らずノックをしてその応答を聞いて扉をあけ，入ったところで簡単な用件を云い，内部の人の許可を得るのがルールである。廊下をウロウロしながら室巣ねらいのように室内をのぞく者や，スーッと黙って入って来てスーッと出て行くユーレイのような者をよく見かけるが。私のように戦争中に軍律の片鱗ごもかじった者にとってはその良い面の一つに部屋の出入についての規律をあげる。その他，次から次へと日頃感じている事が噴出して来るが，今回はこれ位に留めておく。

吳れ吳れも云いたい。学生諸兄姉は紳士淑女の卵である。やがてこの学び舎を巣立てば一人前の紳士として淑女として世の中に迎えられるのである。そのような地位にある者がルールを守らなければどういう事になるだろう。もうこれ以上は言わなくても賢明な諸兄姉にはお分りだろう。

各人が責任をもってルールを守ろう。そうすればどんなに楽しい事かという事をスポーツのみならず，学生生活においても，社会生活においても実現しようではないか。ルールを守ろう。ルールを。

おわり。

〈昭和29年3月卒業生〉

民主主義を育てるもの、個人

2回生　分部行男

人間誰もが詩人である。詩人とはその感情が詩的にエキサイトされた状態にある人を指すのである。又、人間誰しも詩人ではない、と言える。というのは詩的感情を永続させる事が不可能に近いから。故に真の詩人とは詩的感情にエキサイトされた時間が一生を通じて継続している人である。詩人は天才である、所が我々凡人にも詩的なものに接して詩的感情が高められた状態になる時がある。その瞬間に於て詩人であり、詩的なものは全て吸収してしまう、唯、その状態があまりにも一時的なものであるので、詩的感情が消えている状態にある時に詩的なものを押しつけられると、それに反撥したくなるのである。

自治会委員長と云えば聞えが良いが、何んの事はない。体(てい)の良い雑役夫である。この雑役夫になろうといって立候補したのだから何んの不足もない。この雑役夫仕事も一ケ月余り、もう慣れて来ても良さそうなのに慣れる所が実はその反対で毎日雑役に追われている有様である、が、今もって何か割切れないものが胸中にある。というのは自治会の形態には不備な点が非常に多い、まず一つ例を上げると立候補者の信任投票である。成程二百以上の信任票があったが、一体私の何処に信任して下さったのだろう、と頭をかしげたくなる、私というものを何も知らず、名前さえも知らずに信任された新入生諸氏も多々居られた事だろう、矛盾した事ですが私、個人にとっては、自分の任期中のすべての自治会の行動に信任されたと解釈して、実は心丈夫と云った所である。私が立候補した当時、学内では自治会無用論を唱えた一部グループの動きがありました。所がその主張は、一般学生の自治会への関心が薄いので、その関心が高まった頃に再び自治会を造れば自治会が活潑に動くという主張だったのです。この主張が正しいか正しくないかは読者の判断に任せるとして、私としては現状のままで自治会というものが改善され、その活動が可能な所まで推し進めようと言うのである。ここに述べた「関心を持たない"という事は非常に無責任な態度であり、各個人が大いに恥ずべきものである、日本に於ては、精神的指導者であり、所謂インテリを代表する諸学者には何事にも無関心な人が多いのではないだろうか。それを裏付ける例

を上げれば，戦争が始まったのも終ったのも知らずに研究に没頭していた某博士のエピソードが，何かそれが学問をする人々には手本として誇らしげに語られるのを聞いた、又聞く方もそれに感心するのである．が，社会の一員として，又一国民としてその行動が正しかったかどうかは、今の時代に於ても未だ批判されたのを聞いた事がない．この話しが戦前の軍国主義が抬頭していた時代なら兎も角，今は民主主義の時代である。例えこの民主々義が与えられたものにせよ、この民主主義を推し進め，より良い完全な民主主義を造り出して行く時代であると思う．この大切な時期にあるにも拘らず民主主義の最も基本である各個人、各々があらゆるものに関心を持ち，各個人が相互に理解し，生活し良い社会（小さなグループから果ては国家まで各種さまざまな社会）を築き上げるという自覚を持つ，という事が守られているかという事には疑問がある。民主主義と云えば、すぐ"自由"という言葉を頭に浮かばせる人があると思う、が実は民主主義とは各個人、自覚の上に立った統制され、規制された自由と解釈出来るのではないだろうか、又民主主義というのは最も秀れた思想形態と思う．何故なら人間社会というものは原始共産社会から始まって以来，色々形態が異なって来た，そして現在何らかの形で全世界に浸透していると思う．換言すれば原始共産社会から現在までの歴史は人間自覚の歴史であると言える。即ち真の民主主義こそ各個人の人間性を最も最大限に発揮し得る形態であるからである。日本では民主主義が与えられてから現在までの年月が浅い，実は戦后、一番戸惑ったのは現在の大人達なのであり未だ民主主義というものを吸収し切っていないのではないだろうか、それに反して我々青年乃は曲りなりにも民主的教育を受けて育って来た。しかし民主主義推進の原動力は我々なのであり、未来の精神的指導的立場に立つ，所謂インテリの卵である我々なのである，我々はこの自覚を基にして自分自身を高め、社会をより良い方向に向けて行かなければならないだろう．学長の言葉にも大学に於て学ぶ事は、健康であり正しい判断力である と言われたのもこの民主主義を育てて行く為の身心共に健康であり、正しい"判断力"であると思います。

又この"正しい判断力"というものは非常に大きな問題があると思う、例えば，昨年の6月，今年の6月と国会は6月になると荒れるという慣例になっているのかも知れない，この事には一般社会人，政治評論家，学生と各乃毎に種々雑多な意見が斗わされているが，当学内の学生には彼等は彼等なりに"正しい判断に従ってデモなり，色々な行動を起しているのだという意見を持っている人がいる，しかし私個人としては昨年の安保、今年の政防法に

於て全学連がとった大部分の行動には共鳴出来るが，明らかに法律や条例を犯してまで行動を起すのは絶対に赦されない事だ．この身近かな京都でも現制以外の場所で，現制以外のデモをして，学生の大切な体に傷を受けた事があったのは誰しも記憶に新しい事だろう．このようなデモを行う事によって社会の不評を買い，本当のデモンストレーションの価値を落しているのではないだろうか。紀元前に"悪法も法なり"という言葉を残して自分の命を自から絶ってまで法を守った人と，法を犯して命を落す人との間には測り知れない程の差があるであろう．現在，20世紀の現在に於て，この精神は忘れられているのではないだろうか、私の信条は「法は絶対的最高のものであって，何人たりとも，これを曲解し，犯すべからざるものである」という事である。直接学生の政治運動には関係がないが，法の解釈という事には非常に危険性が含まれていると思う。成程日時がたてば，その解釈が異なるかも知れないが，事，憲法に関する限り，その時代時代の解釈が異なれば"法"そのものの信用を落してしまう。貨幣でも国民すべてが子安貝を信用すれば今の貨幣は何の値打も持たない．法もそれと全く同じであろう．日本国憲法第九条に於ても又同様である。敗戦を迎えた当時，世界は日本が武器を持つ事を恐れた、又誰しもそれを望まなかっただろう．日本国憲法が発布された時，それは平和憲法として世界から好評を博したのである。所が近年、最高裁判所では自衛隊をもつ事は違憲ではないと断言した。誰しもが第九条に何かしら多少の矛盾を感じているだろう。第九条はあくまで全世界に戦争の放棄を訴えている"…… 国权の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は国際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する……"

所で話しを学内に戻して、私が早急に実現したいのは学内新聞の発行の事である。この発行に先立ってまずしなければならない事は新聞編集の組織を明確にし，且つ強力なものにしたいという事である。この事に関しても公聴会という形で直接に先輩諸氏の意見を伺った。唯あの自治会規約で問題になるのは新聞局員が2名しか認められていない，又編集員公募によるシステムには規約に規制されていず，現状のままでは不満な点が多い、又委員長が代れば当然新聞局長も代わるので新聞編集者として永続性がない等である。
又前号での記事で機関誌の存在意義にも述べられている事がもう一回り規模を大きくして当学部での何かの話し会いの場を求めようという動きがあってしかるべきだと思っています，新聞が各個人の間接的討議であるならば，直接的討議である討論会や学術大会も，　　これからも開いて行きたいと思っています，即"もっと何かをしようじゃありませんか"という前に"

「もっと何かを言おうじゃありませんか」という事を提案したい。つまり学内での討論は教職員側も大いに認めて欲しい。言うならば、無許可にしてほしいのである。

現在の学生は案外マルクスやレーニンの方の分野は研究しているが，資本主義の方はあまり研究していないように聞いています。つまり、学生が研究する分野が一辺倒になっている場合が多いと思う。しかし学内に於てそのような種々の主義を討論し話し合う事が必要ではないだろうか。議論したりするのは何もこれらに限った事はないが、結局は直接的な話し合いの機会を多くもてば、当校のような規模の学校では案外首尾よく運ぶのではないだろうか、又数年前一部の過激派が学生達を煽動した前例があって以来，毎年、春の新入生との懇談会では年中行事の一つとして，例の言葉が言われるのである，しかし，この一部の過激派が犯した罪の責任は、この少数の過激派にあるのではなくして，むしろ大多数の学生の無関心さ及び〝正しい判断力〟を欠いた事にあるのではないだろうか，学生の大多数が良識ある判断の下に行動を取っていたならば，その時の罪が10年後の我々まで及ぼされなかっただろう。故に我々は良識ある判断をもち，学内の自治に大きな関心をもち，協力し，多大な意識をもち，すべて紳士的に行動し，その行動に責任をもち，又すべての教職員とは相互理解と寛容の精神をもって接するならば，教職員側の態度硬化も柔らき真の学内の完全な自治がえられる事と確信する、又学校側も，世間での正常な頭の持主に〝刃物をもたせない運動〟をし低脳児には素晴らしくよく切れる刃物をもたせて成功した、というような矛盾した例に似ないように，現在の学生を心から理解して，学生がよりよい学園生活を送れるようにご指導をお願い致します。

次号原稿募集及び編集部紹介

次号第9号は夏休みが終れはすぐ発行する予定です。2ヶ月に及ぶ休暇中の出来事―学外実習、旅行，登山・実験等々……についての感想，報告など，生気に溢れる生活体験を原稿にしてどしどし持って来て下さい。

4回生	荒谷善夫	2回生	有松利雄
〃	早川和彦	〃	金井政洋
〃	荒瀬治夫	〃	樋本　勲
3回生	木下泰忠	〃	堀江　広
〃	沢野敏実	1回生	井上隆之
		〃	川村了一

雑感

内藤謙一

最近うすうす感じている事がある。それは奇矯なものは弱いという事である。

奇を好むというか、仰々しい事は日本もドイツも大好きらしい。先だって一といってももう数ケ月以前になるがーナチスの残虐ぶりを扱った記録映画を観た。之は此の種の映画ではニュールンベルグの裁判を扱ったものに次ぐ之番目のものだったと思う。此の中にヒットラーに率いられたナチスの勃興期の写真が出て来る。あくどい迄の仰々しい服装の隊員が文字通り鳴物入りで市中行進をして、ナチス党の威力の誇示をし宣伝をする。一見華やかな此の行進はその表面での派手さの陰においやうの無い陳腐さがつきまとっていた。又、他の場面では全国から集った青少年ーいわゆるヒットラーユーゲントーを集団で勤労奉仕をさせているところがある。こゝでヒットラーが彼等を激励するのであるがその言葉がなんと"将来のドイツの青年は背は高くすらりとし、眼光はけいけいとして云々"という何とも空虚極まる馬鹿々々しいものである。之を大ぎようなヂエスチュアと吃えるやうな声でやるのである。之に対して青年等は感きわまったやうな様子でヒットラーに忠誠を誓う。集団勤労奉仕をしなければならなくなっているという切羽つまった状態が芝居がかった演説でうまくぼかされ、而も青年等は之に気付いていない。此のような光景は戦時中の日本でも随分あった。その最たるものは神道に結びついた一連の国粋運動であったように思う。内原の満蒙開拓義勇軍の訓練所や右翼、国粋主義者の様々な塾や結社があった。みそぎと称して厳寒に水を浴びたり、漢字の成立ちを解析して之を神道に結び付けたり、身近かなものでは千人針、日の丸弁当、竹やり訓練等々。精神主義であり、せつな的である。合理性がなく、連続性がなく、生産性がない。非力さを補うのに少しもその方向に集中されない。之ではとても問題にならなかった筈である。

神風特攻隊が米国の艦隊目ざして悲壮な決意で飛立って行く時、米国の艦船内では将校連中がパイプをくわえ乍らレーダーで探知している写真をみたとき程、科学乃至科学性の非情なまでの強さを感じたことはなかった。之が当り前なのである。突飛な事、仰々しい身ぶりで驚かしても、そのようなものは、一時的であり、本物には通用するものではない。だから私は結局、大ぎ

ような身ぶりをする必要のないようにしておけと云いたいのである。平素，地道に農業的でなく工業的に，美学的でなく実学的に，人間的でなく金銭的に，静的でなく動的に心掛ける事が大切なのだと思う。非人間的にと云えば人文関係の先生方から一喝をくうかも知れないが，とかく事実はそのようにすくはない。そ知らぬ顔をしていれば，それで済んでしまう事である。

心違い

4回生　近藤孝一

中国は宋の代，四面に強国ができ，いわゆる漢人が，野蛮人として蔑視しているはずの，それらの国々に年々貢物を贈って，ようやく征服を免がれていた時代です。

しかしながら，宋の都では，活気あふれ，文官達が壮大な邸宅を構え，夜昼となく宴を開き，国境のどこかで，異民族との戦いが，行われているとは，想像も出来ない程でした。

その文官達の中でも，まだ四十を少し越えた程の，見るからにどっしりした，赤い顔の，よく肥えた男が，きわだって目につき，その男の上位と思われる人々も，その男と話す時には，一種独特のムードから，まるで位が逆になるように見えました。

その男は，孫と云う姓を持ち，あの難関の，進士の試験に，一番で合格し

その後は，だれからも注視され，何をするにも，まず孫にたずね，又行わ

ましたが，孫はその与えられた仕事を，全く申し様のない程，うまく処理し，同期の人々も，彼だけ，重宝がられているのを，妬む事さえ忘れる程でした。

孫は，地方の，名門中の名門の家に生れ，小さい時から，人々に丁寧にあつかわれ，学問をさせても，群をぬいて，素晴らしいものでした。又，彼は人一倍　努力する方でしたので，鬼に金棒とはこの事と，皆々云ったものです。しかしながら，彼は，無目的に，その様に，やたらに，張り切ったわけではありません。彼は，物心つく頃からすでに，ある物を，無意識にも，大切に持っていました。自分が，その物を意識するようになると，増々，それを可愛がり，大切にし，しかも，それを大きくしようとしました。何もしないで，自然に大きくなるなんて事は，虫が良すぎます。かえってそれは，小

さくなり、こわれてしまいます。

だから，彼は、それをまもり、強大にするため，非常な努力をはらいました。ある者は，彼に負けるものかと，一生懸命に，ついていこうとしましたが，叶うはずがありません。やがて，彼は，他の者と，くらべようもない程の，大きな物を得、その物は，尚も，大きくなろうとしているのです。他の者達は，それぞれ自分の一番大切な物をもって，彼の所を訪れ，ある者は，財産と，ある者は，地位と，他の者は，女と、取りかえてくれるようにたのみましたが，彼が，聞くはずがありません。人々が，そのような事をすればする程、増々、自分の持っている宝を、豊かにし，誇り高く思うようになりました。

このようにして，四十過ぎにして、長官になるのは，もう時間の問題だと他の文官達に噂されて、当人も，それを、不思議とは、思っていませんでした。その頃の常であった．賄賂を使って、長官になるなんて事は，考えてもいませんでしたし，もしその様な事をすれば，彼の後生大事にしている宝を元も子もなくしてしまうのは当然の事です。

1279年、蒙古が，宋を攻め、文治主義の宋は，全く，あっけなく，滅亡した。被征服者の，当然の末路，あの栄華を誇った文官達も、没落し，下級官吏として，蒙古人，色目人の下で，こつこつと，下仕事をやらせてもらうのが，関の山であった。

長官を，目の前にしていた、孫にとって，彼の生涯、初めての失敗であって，鬚づらの，彼にとって，見るからに、無教養にみえる。蒙古人の兵隊にどなられ，足蹴にされた彼は，その時、自分は、宝を持っているんだという事を思い出し，この兵にその大切なものを与えようと思った。その瞬間、彼が，今まで大事に育て上げた強大な宝は，目もとまらぬ速さで、消え去り、後に残ったものは、一個の小さな，見るからに，みすぼらしい，安物の，真珠だけであった。

その後，彼は蒙古兵の下で，下働きをして、生活を送った。彼は、今まで持っていた，大切な物を持たないでいる事に、初めは非常な不満を感じたがやがて，それを持たないでいることが，いかに快適であるか、今まで自分が宝と思っていたものが，全くつまらないものであり，くだらないものである事を知り，今では、生活の，よろこびを感じながら，その，たった一つ残った真珠が，全く自然にだんだんと美しい高雅な光を，出しはじめているのを感じていた。

学生運動についての所感

4回生　早川和彦

いわゆる学生運動が我々の学生生活に於て占める比重の一つである事は本学部自治会が、府学連その他の学外政治団体に所属していないにかかわらず事実である。この十何年かの年月を経て来た学生運動について、今一度じっくり考えてみよう。

まず学生運動とは何か、――学生の行う社会への働きかけである。

それでは学生とは何か、――大学に学んでいる青年達である。

もう一つ大学とは何か、

さて大学とは一体何であろうか。

大学とは、学問の研究を行う場であり同時に教育の場である。そしてこの研究にしろ、教育にしろ、最高度の水準で行われる故、大学の事を、最高学府とも呼ぶのである。又それ故、大学に於ては、研究し教える者も、学ぶ者も、常に真理の探求を目的とするわけであって、この真理の探求のためには手段、資料といったものには何らの制限も受けてはならないし、一方それらに対しては、正しい理解と認知とそれに加えて冷静な判断を下す必要がある。これらの手段、資料の選択が自由である事、又、収入を得るため、契約をもって職業に従事しているいわゆる社会人とは異なり、学生は自分の全くの自由意志により、学問に従事している事から、大学の事を自由の殿堂ともいうのであろう。

この真理探求の学府・自由の殿堂にいる学生は、学生として、同時に現代社会を構成する社会人の一員として、日常生活に於ける全ての出来事に対し科学的に誤りのない判断を下していかなければならないのであろう。

この様な自由に対して真理を求める日常生活の積み重ねのうちから、いわゆる一般社会人の気づかぬ国家ひいては世界の正史の流れを、参政権と参政の義務を持つ社会の一員としての学生の立場から、率先して表明していく一即ち、具体的には政治、経済、教育、文化等々に対して働きかけを行うのが学生運動であろう。そしてこの自由な科学的精神から出た働きかけを助けるエネルギーとなるものが、青年としての厳しい倫理感、何ものにも曲げられない正義感、青春の勇気、独立心である事には、疑問の余地がない。

この学生運動のもつ性質と，現在行われている学生運動の相違及びその相違を生じた原因を知る事なくして、いや、知ろうとする事もなくして，ただ単に「就職」のために学生運動に目をとじるというのであれば、即ち，事実——真理—— を捨てて，一身上の利益のために節を曲げるというのであればそれ程，大学及び他の大学生に与える大きな侮辱は他に無いであろう。まあ少くとも，その様に保身のためにeasyに妥協するが如き態度は、「有能なる技術者であると同時に、紳士であれ。」というモットーを持つ本学にとってふさわしくない事は自明である。

それではなぜ「現在」学生運動が広く社会に支持されないのであろうか。まず考えられるのは，世界の情勢，少くとも国内情勢に対する客観的判断の誤りである。客観的判断の誤りは判断方法の誤りに起因する。情勢判断、現状の分析といったものを正確に行うには，今まで起って来，かつ今起りつゝある種々の現象に対して先入観なしに「好き嫌いせず」考えられる全ての方向から検討しなければならない。ただ一つの方法で、「公式」すら充分に理解せずして「ありとあるもの—— そは公式なり。」といった方法で分析したとしても，又それがその方法に対しては忠実であり純粋であるとしても、それはただそれだけの事で，歴史の流れを正確にキャッチするという所までにはとても及ばない。こゝにわざわざ記すまでもなく，人生観が先にできてから人間が世に現れたのでないと同様、判断方法がきまってから、歴史が始ったのではない。歴史の事実は誰が何と云おうと存在するのである。現在生き物の如く刻々と変化する全ての事象も又厳然として存在するのである。この複雑きわまる社会を確実に把握するには，今までに自分が自分の「もの」にしている全ての判断方法，鋭い感覚をフルに働かす必要がある。もし「自分にはただ一つの方法しかない。」というのであれば，それは偏見である公算がはなはだ大であると言わねばならない。

次に考えられるのはその運動方法であって、 それは戦略的動揺性という事である。これは学生運動が学外の政治勢力と結ぶ場合である。先にものべた通り外部政治団体に加入して，それによる制約を受けるという事は、自由の殿堂である大学，自由である事によって可能な真理探求の学村に居る価値を失わしめる事は明らかである。まして効果を上げる事にのみ熱中するあまりその主張する所が角動的になり，最初に判断し、認識し，その結果表明しようとした真理を裏って来るようではナンセンスもはなはだしいと云わねばならない。この様な戦略的手段が「学問研究及び教育の場」たる大学本来の

使命と矛盾している事は余りにも明らかである。

又，学外の勢力と結んで非合法の実力行使を行った場合、大学自治の問題をめぐって，世間から誤解と非難を受ける事は今までの学生運動の正史からはっきりしている。非合法な手段を用いて，民主々義を守るなどと云ってもその効果たるや疑問がある。

もう一つ考えられるのは，主流派と反主流派といった様な派同志間に見られる主導権の争奪である。本来の学生運動の目的を忘れ，一人前のプロの政治屋気どりで党利、党略のための派閥争いのみをやっている様では何の意味もない事である。主導権を把るために理論的に優位に立とうとし理論のアウトラインをきわだたせるため、もう一つの派との貴重な共通の主張をひっこめ、けずり，そして無視しようとするため，最後にできるものは，純粋ではあるが規模の小さい独善主義の結晶のような物である。その様な「最初に表明しようとした真理の面影が，全然認められないわけでもない」程度の思想を振りまわし，相手の主張を通さぬ様に「高等テクニック」を用い，わずかな面影に心をひかれている学生を「動員」し，主導権確保のためにせっかちに運動するという事に一体どういう意味があるのだろうか。

それでは次に我々は学生運動について短い大学生活のうち，これからどの様にすれば良いのであろうか。

それはまず他の考え，言葉を借用せずに，全ての社会現象に対して自分で理解し，判別する事のできる豊富な感受性を養う事であろう。

そしてそれと同時に，最初に述べた様に表明したいという意見なり，思想なりが出て来れば，自信をもって時と場所を得て，堂々と明らかにすべきであろう。

大学の生活はわずか4年である。この4年の間にあらゆる事件，事象に対しての判断力の基盤を大学生活を経た事に値する程度のものとして得なければならない。ところが我々は，自然科学の領域の学問を専攻している。

したがってマルクス・レーニンの経済理論，ケインズの経済理論をマスターする事は殆んど不可能であろう。しかし片よらない視野でもって物事を判断するという事は，この両理論を用いて判断するという事ではない。先程からあちこちで舌足らずながら何回も述べている様に，要は感受性といおうか判断力といおうか，我々が教養科目で得たいろいろの「ものの考え方」つまり心理学的，哲学的，経済的，社会学的，法学的，美学的…… などの種々な立場からの見方，それに加えて専門科目を通じて得られる科学精神が一体と

なってでき上って来るところの感応性である。

この精度，感度共に弾力性に富み同時にするどさをそなえた感応性でもって社会の全てのでき事に正面から当り正しく見、正しく理解し，正しく判断していく事が最も望まれるのである。

今迄のこと

研修生　長瀬純子

14年間の学生々活を送り一応それにも終止符が打たれた私にまた新たな生活が始って早3ヶ月，こゝにこうしてCHAINの原稿を頼まれて書くに至る日　思うと全く……全く時の経つのは早いものですね。
そう4月の3日でした。スタートを切った日，それ以来与えられた実験に洗礼に，その他諸々の事に時をついやし，そして今日，今，思い返してみるのです。

私の高校時代は全く灰色の世界でした。　それに控えそんな事をすっかり忘れさせてくれた短大の2年間，共学の学校から女学校で生活した2年間，それは毎日毎日が自分なりに意識することができた2年間でした。
決してとどまっている毎日ではなく，確かにこれは自分なりでしようがそう解釈していますし，実際今でも後悔のない2年間でした。
ただ学校の空気には何かファイト，いや厳しさはだいぶ欠けていた様に思います。それは忙しさのために打ち消されていた様ですが，やゝマンネリの状態と指していう事ができるでしよう――。それは明らかに短大という名が示す通り、又一般の人が解釈しがちな考えで通学する人がみられる雰囲気にあったからだと思います。自分を棚に上げて。
でもやはり自分は真の学問的な分野に於ける科学の探究とか物理の研究を目的に勉強しようと思わなかった代りに，より以上の自分を――より以上の自分であってほしい、毎日の生活をフルにやっていきたいという野心と希望と夢と――の期待から学んでものでした。
宗教的雰囲気の中に，しかも御所を東隣りに控え環境的には恵まれたその生活は、何はともあれ無神論者である私でも得る所はありました、そう確かに学校に流れる何とはなしに根強く支配するそして自由な精神とでも云おうか――それはとうてい私の到達し得ないものではあったけれども……。

いやむしろ，これらは単なる口実であるかもしれません。というのは、
礼拝の時間には聖書を持ってトイレに隠れ，いやな講義の時は御所でリンゴをかじり乍らいつまでもだべり，全く得る所があったと云えましょう。それぱかりではありません。
いくら宗教的な雰囲気に包まれていると云っても学校経営は普通の学校とそう変らなかったでしょう。それにもまして私が意識しすぎたのかもしれないが先にも書いた様に礼拝の時間 —— 本当に神を信ずる信仰するそれは信者でなくとも、自分の内からわき出た純なる気持ちの表われであったらいざ知らず，半ば強制的にその時間を迎えさせられては，はたしてその意図しているものにかなっているかどうか——。
また教師と生徒間のつながりに対する疑惑の念はかえって強調されたかの様でした。つまり非人的な，人間と人間との衝突ではなく，物と物との衝突であるかの如くに。鬼角インスタント時代であるが為か、流れ作業式であるが為か知らないが，いわゆる商品の売買の如くに思われる面の事でしょう
多分その辺——。 私は学問的な面で頭を使うことはできなかった代りにこういうやゝこしい事で頭を使ってかってに考えていたのかもしれません。とにかくこんな中にも楽しくやってすごしたのですから，今から思えばかなりの冒険であったかもしれません。
学校生活でも家庭生活でも，日々自然にそして規律ある中にも自由に将来に向って立ち進んでいけるならば——。 それがたとえ冒険であったとしても-----。
今は，およそそれ迄と異った一実験器具の総出演する実験台，薬品，泥だらけの機械の立ち並ぶそんな部屋で一毎日をすごすことは，それこそ前に代る本当の冒険かもしれませんね、そしてよくしゃべり，よく食べるのは男女問わず学生には共通であったという事を改めてしらされました。多分こんな事が私のこゝへ来てから頭に入った事でした．つまらぬことかもしれませんがこれまた生活する上には必要で十分な条件ですものね。
私共にとって一年というものは，どれだけ貴重な事でしょう。生れたばかりの人間がやっと立てる様になるのも一年，春夏秋冬とその時々の折りなす事柄は、決してもどる事を知らない永遠のものです，私はこゝで一年先迄に関する事をやることになっています。いやほそぼそ乍らもやりつゝあります。その後は —— わかりません．一年後にまた“今迄のこと”と振り返ってみれば何かわかるでしょう。これから毎日毎日のその後に。期待して。
およそかってな事ばかり書いてしまいました でも以上は今迄の事です。

ある男の話　—その断片—

4回生　西久保敏規

その男は，いつも，うつむきかげんに左側を歩く癖があった。
彼のそのようすを，世をすねこいると見る人もあったが，それは正しくない。
彼には，毛頭，そんな気持はないのであった。これは私が彼から直接に聞いたのであるから信用出来る。
まあ，それは良いとして，彼のその歩き方は，実際にも具合が悪かった。多くの人々が右側を歩いているのに，一人，左側を歩き，しかも，下を向いているのだから当然である。私が彼に，それを改めることを忠告すると，彼はだまって聞いていた。だがその次に会ったときもやはり左側を歩いていた。
無意識にそうなるらしい。
その男はいつも無口で，陰気な顔をしていた。眼鏡をかけた眼を細めて，だまっていた。用事のない限り，こちらから切りださねばめったに口を開かなかった。しかし，彼が不機嫌なためではないことは，彼が，自分に興味のある問題になると，殆んど，身をのりださんばかりのようすで話すことからも分った。
その男は，もともと，私の友達ではない。といって全くの他人でもない。なんとなしに知り合ったのだ。その男は建築技師であった。そして，いつか素晴しいヴィルディングを建てることを一生の夢にしていた。彼に言わせると日本のヴィルディングは，窓の使い方が下手だということであった。彼のこの言葉を信用して良いかどうか私には分らない。私はそれに専門家でない。
そんな夢を持ちながら，彼のようすは，全くそうみえなかった。そういうところが彼の特徴であったのかもしれない。全く，彼が何を考えているのかは，かなりつき合っている私でも分らないほどであった。
その男は小さなアパートに一人暮していた。親や兄弟のいるようすはなかった。そのことについて私がたずねた時も彼はやはりだまったままであった。
彼はアパートの近くに，彼の建築事務所をもっていた。
しかしその中はガランとしていて一向に仕事場らしいようすはなく，製図用の道具が申しわけ程度に置れている他に，三枚の写真が壁に貼ってあるきりだった。事務所には，その男の他に人はいなかった。しかし彼は別に忙しよ

うすはなかった。その男のあわてたのをついぞ私はみかけたことがない。とはいえ，その男も"かすみ"を食って生きているわけではなかった。時折、私に会ったときなど，自分の今やっている仕事について話をした。そんなときの彼はいつもより少し気色ばんで，情熱的にみえた。しかし決して興奮してもいなかったし，子供のようにはしゃいでいるわけでもなかった。いつも冷静な男であった。

その男と別れるとき，私には，その男の後姿がひどくみじめなものに思えた。それは世間の苦悩を一身に背負っているといった類のものであった。

その男は知り合いが少なかった。私の他にかぞえる程しかいないようだった。いつも一人でいるときの方が多かった。一人でいても決して淋しいようすはみせなかった。といって孤独を楽しんでいるようでもなかった。自分と自分の心の中で話しあっているようであった。その男はいつも一人だった。

その男の年令から言えば当然結婚していて良いはずであった。彼にはその意志は一向にないようだった。少くとも彼の素振りからはそうだった。私は彼に，結婚する気はないのかとたずねたことがある。その時も彼はだまっていたが，ただ一言"なかなか難しい問題だね"と答えた。

そんなことにもかかわらず，彼は近く結婚するのではないかと思う。最近私は、彼が女の人と一緒にいるのをみた。その女の人は、およそ彼の人柄に似合わない派手な感じの人だった。水色の上衣を着、イキな形の帽子をかむったところは貴婦人のようだった。その女の人は、周囲の視線を引いた。しかし，彼はそんなことに頓着しているようすはまるでなかった。私は意識して彼に声をかけずにいた。

要するに，その男は，私には，全く謎だった。かなり彼のことを良く知っている私にさえ。その謎は謎にみえず，しかもやはり謎だった。彼という人間を把握しようとしても全く分らない。私はその点で、今まで，多分努力してきたつもりだ。だが結果は失敗だった。うまく彼という人間を掴みえたと思っても，次に会ってみると私の解釈は間違っていることを思いしらされる。私は，彼という人間を完全に理解するにはあまりにも未熟すぎるのかもしれない。もっと人生の熟練者であれば別なのかもしれないが。

しかしまだ私は、彼を理解しようとする努力を放棄したわけではない。

今日も，彼は、左側を，うつむきかげんに歩いているのを私は見た。

今はなき忠子を悼んで

4回生 川端宗成

思い返せばもう一ケ月も前のことになってしまった。
丁度椿の花が落ちるが如く君は去ってしまった。
明日からは永久に別れることをみじんも見せず前日いやその前夜にもご機嫌よう又明日もお元気でと言い合って別れたばかりなのに、互いに交したあの別れの言葉が君との最後になろうとは ------。
君にはあの頃の天候は堪えられなかったのだろうよ、ある日からりとさわやかに晴れ渡ったと思えばその明る日には一段と冷えこみが激しい日になるような不順な日々が続いたからね、でもすべて僕が悪いんだよ、ゆるしてくれたまえ、でも君も勇敢だったよ、すべて整った暖かなお母さんのもとでもう少し養生し、もっと気候もよくなってから僕のところへ来てくれゝばよかったのに、それにつけても僕はすまない、君は僕を信頼してお父さんお母さんのもとをとび出し僕の懐にとびこんできてくれたのに僕は何もしてあげられなかった。今から思えばあゝすればよかった、こうすればよかったといろいろと思いおこされるがでもあの当時は僕も一生懸命だったからね。
僕は今でも一番悔まれるのはもっともっと食養生し、住いに気をつけるべきだと思っている。君はごはんとかおうどんは非常に好きだ。病人とも思えないぐらいおかわりを僕に要求したね。でも君は動物性蛋白質はあまり好きじゃなかったね。それにもまして君は野菜を全々食べなかったからね、
あれには僕もどうしてよいか途方にくれてしまったよ、又僕があまりにも健康すぎて未だ元気になれない君の身体に同情なさすぎたとも思います。
さぞかし君も寒さでつらい思いをしたことだろうよ、
でも短い間だったが僕の側にいてくれた間は楽しかったよ、僕は毎日の生活が充実し、はりのあるものだった。僕は君を愛しました、どんなに愛したことでしょう。恐らく人がこの世において愛するものが何であれ、それはそう大したことではないと思います。しかし人は何物かを愛せずにはおれないのです。勿論僕もかって他の女性に"ほのかな思い"をはせたこともありました。しかしそれも一方交通にすぎなかったのです。そしてそれだけで充分ではなかったのです。君と僕とのようにお互いの生活を分ち合ったようなこと

は一度もなかったのです。そして僕は君だけで充分満たされた気分でした。君はお世辞にも美しいとは人は言わなかったろう、でも僕には君は全く美しいものでした。ことに僕が何の前ぶれもなく、突然に君の死を知らされ、半信半疑で君の死の床に近づき、君があおむけになり静かに眼を閉じている姿は絶妙に美しかった。僕はこれから死ぬまでいや死んでも、短かくはあったが、短かければ短かいほどよけいに君との楽しかった日々のことを忘れないだろうよ、どうか静かに眠ってくれ給え。

この上記の一文は某研究室の学生の中で全然情緒を解さず、情操方面の教育がないと云われるB君が雀の死を悼んで書いたものであり、文中すべての事柄は事実に基づいて書かれ、何の虚構もないのである。
事実五月始めのある夕方折からの夕立を避け、繊維化学教室に未だ巣立らしたばかりの雀がとびこんできた。たまたまそこを通りかゝった前記の一文を結んだ大男のB君とこれ又同級の"五尺十一寸"あると云われる大男のS君の二人が四苦八苦してとりおさえた。（大男の両君が小さな雀をとりおさえようと四苦八苦する姿を想像するだけで楽しいことではないか）。
早速B君が彼の棲する研究室へ持ち帰った、そこで同じ部屋のIさんNさんK君とで協同組合に走りうどんの切れ端をもらい餌付けに成功し、短いほんの三日間ばかりではあるが、皆夢中になったのである。まず名前をつけようということになり、忠太郎・忠子・忠誠（御大先生の御名前から一字頂だい致しました。失礼!!）等いろいろ出されたが我等男の中の男の中で生活するのであるから、この雀は女性であると都合よく合議の末決めてしまって忠子（ちゅうこ）と名付けたのである。この忠子を皆がかわいがり愛することー通りでなく、Iさんは忠子と親しくなり雀の言葉を理解し二人だけの秘密の会話をするようになるんだとか、ヒューマニストの誉れ高いK君はチューマニストを示して彼女の将来のことを考え、彼女の婿捜しをしてやらねばならない。三国一の花婿を求めるために金のわらじを履いて捜す労は何ら惜しみはしないが、その最もよい方法はその銓衡のため彼女を"おとり"にして出来る限りのオス雀をとらへ、その中から最優秀な一羽を選び他はヤキトリにして頂戴してしまうとか（大食家の彼の考えそうなことだが）その他いろいろ途方もなくばかげたことを考え出す始末である。しかし三日目の朝、哀れ彼女は昇天してしまったのである。なお文中動物性蛋白質云々は彼女はサナギは好きだったがくもやみゝずは食べなかったし、野菜やはこべは見向きもしなかったのである。そして三日目の朝彼女は前夜の寒さのためか死んでしまったのである。

美しい質点

4回生　荒谷　善夫

人が通る，電車が通る，車が通る，トラックが通る。四つに組んだ竹の棒と，五つ六つの箱をつり，ホタルを売っているK子は，もう三時間も前からむし暑い街角に立ち続けていた。

K子がホタルを売っているのは，このあたりでは一番賑やかな交叉点であるが，この辺一帯はどこの大都会にもよくあるいわゆる街はしで，まだ野菜畑が残っていたり，空地があったりしていた。だから，かなり賑やかな通りがあると思うと，ポツンと工場が立っていたり，紅がら格子のはい家があると思うと，急に露路が折れて，ゴクゴタと長屋があったりした。しかし表通りは，金融機関の建物や，パチンコ屋などがあり，交叉点の面目を保っていた。その外，この巷には，古ぼけた寺があり，くずれかけた壁が，電車通りに面していに。市場も立っているし，自動車のガレージもあった。そうしたもの一切が，この巷を形づくっているのであった。だから，そこには派生の複雑さはまぬがれなかったが，又変化の面白さがあった。よく晴れた日にはいかにもしらじらしたこの巷の景色も，一旦雨雲が低くたれこめると，又他では見られない景色となった。黒ずんだ家並が少し黄味を帯びた空の色にくっきりと浮び出る。そこここのトタン板がギラギラと鈍い光りを放つ，裏庭によく見受けられるガラス屑や煉瓦が，あたりの灰色の景色とぴったり合って，その重厚さを増す。電車の騒音がじめじめした露路の間を走る。すべてが，灰色の空のもとでは，生き生きと甦るのであった。

K子一家がこの巷の丁度中程にある長屋の一軒に移って来たのは，もうかれこれ，十二，三年前であるが，幼ない記憶をたどってみると，彼女が母と兄に手をひかれて，この近くまで，家を求めに来たことを今でもはっきり覚えている。

一家と云っても，父は，K子が四才の時，戦死したので，父が眼がねをかけていたこと以外，彼女には，父の思い出はなかった。兄は，この地へ引越して来て以来，近くの織物工場の職工として働いて来たが，一昨年の夏，自分の運転していた単車が，トラックと衝突して，即死した。兄は生前，彼女をつれて，よく近くの山に登った。そんな時，彼は知っている限りの歌を妹

に教えて，よく二人で歌った。彼女は，その歌をすべて自分の日記帳に控えておいたのであるが，一昨年，そのページを破って，兄の墓に埋めてやった。こう云った不幸があって，彼女は今は母と二人暮しである。

母はもう60才に近く，その上，体も弱かったので，洗濯，食事，あと片づけなど，家事の大低をK子がやらねばならなかった。朝は6時に起き，一日の家事を済ませてから，こゝに店を出し，夜の9時半頃まで，こゝにこうしているのであった。それでも最近は，母が入院したので　少しは家事が少なくなって楽になった。

今日は，未だ6月が初めだと云うのに，非常にむし暑い夜になった。K子は膝の上にのっている新聞を丸めたり伸ばしたりして，客を待っていた。もう先程から，派手なネオンサインが都会の夜に活気を入れていた。丁度K子のななめ向い側にあるパチンコ店の赤いネオンが，少しうつむきかげんのK子の顔を濃いピンク色に染めていた。丸顔で，目の大きいところは，死んだ兄と似ニツであるが，髪が真中から二つに分けられてあって，額のところに巻毛が下っているせいか，何か淋しい感じのする顔だちであった。

あたりは，いよいよ，ネオンの数が増え　中一人連りが増えて来た。学生風の三人連れが何やら議論しながら，彼女の前を通りすぎたが，すぐもどって来て，一緒買って行った。白ワイシャツのソデをまくり上げた三人の後姿を眺めていると，　兄のことが頭に浮んで来た。兄はよく，いつかホタルの光りについて研究したいと口ぐせのように云って居たのを思い出したからであろう。こんな思い出にふけりながらぼんやりとしていた丁度その時，あたりの人の群から「火事と違うかあれは」と云う声が聞えた。この辺は微かに建った工場の多いせいか，よく火事が起きたので，K子は，『又火事だなあ』と思いつつ人々の指さす灰色の空を眺めた。東南の空がほんやりと明るい，古代朱のうすい光のようであった。何時もと違って，今日のは，チラッと不安がきらめいた。K子の家の方角だからである。無気味な騒音が一瞬あたりを支配した。電車の音も，自動車の音も，すべての都会の雑音がぱったり止まったかと思った。がそれも長くはなかった。あたりの人声が高まり出した。「工場の方だぜあれは」「いやもっと遠い処だ」「然し，火がもうほんそこに見えているじゃないか」　K子は次第に気になり出した。光りは急に大きく拡がっていく。「私の家の近くではないか」「どう考えたって私の家の近くではない。」と彼女はしきりに心の中で打ち消した。が，すぐ又「自分の家の近くだ」　と云う気がした。胸がつまってくる。つまり不安詮索が続く。　「そうでない」　「決してそうでない。」と一応打ち消して

ばみても，やはり眼前の光を見ると近くであるという疑念は濃くなるばかりである。もう火の手が見え出して来た。この上，おっとしている気にはとう底なれなかった。店をたたんで家へ戻ろうと，やぐらの所へ戻ってみると，未だ4箱あったホタルがない，「変だ」と思った。こんな筈はないと思った。何度もあたりを探したがやはりない，持って行かれたものがホタルであるだけに彼女は非常に悲しくなった。急に眼前の空間が遠のいた，
隣りの夕刊。）のおやじが変に思ってゆっくりと太いバスで尋ねた。「どうしたんだい」「ホタルが無いんです、ここにおいておいた」すぐ返事が出てしまった。「えゝそうか、じゃさっきここに」「何です」「さっきここにいた黒い帽子の男、今この通りをあっちへ行ったあいつが」彼女は夢中であった。「見てやるからこの通りを北へ」「お願みします」不思議に彼女の語気はしっかりしていた。K子は教えられた方向に一目散に駆け出した。走った所で，どうにもならないと思いながら、それでも走らないわけにはいかなかった。彼女は人波を泳いだ。「黒い帽子の男」然しそれらしいものは見つからない。二・三人に聞いてみたが，誰も返事をしてくれなかった。
「火事」「火事」人々の群は、今K子が走っている反対の方向に流れていた。それでも彼女は走ることをやめなかった。細い両腕を触覚のようにかざして人々の間をぬって走った。彼女は何度も人々の群に流されそうになった。彼女は必死になって走った。走っているつもりであった。ホタルのあの消えそうな光は見える筈がなかった。ケバケバしたネオンの海の底にあっては，その虫は，余りにも小さな貝がらにすぎなかった。

急に舗道の石畳につまずいたのかK子の体は，よろめく様にばったり倒れた。すべてが突然の出来事であった。

ハッと我に帰ったK子の肉体に，湿った地面の冷気が上昇して来た。いつの間にか，むし暑いどんよりした雲から，雨が降っていた。彼女はなぜか，愛を手でかき上げた。耳のすぐそばを多くの足が動いた。彼女にはその雑音が次第に遠のいて行く様に感じられた。意外な程に心の平静があった。絶望から来る平静であった。

急にはまり込んだ深淵，林立した矛盾，一瞬今まで考えていたことが，ぷっつり糸の切れた様に中断された。極限に迄緊張していた細い一本の糸がぷっつり切れたのだ，火事が自分の家の近くであることも，あすの生活のもとでが失なわれたことも，兄への思い出が奪われたことも，母の病気のことも，今は頭には浮んではこなかった，自分が，雨にぬれて，人々の波の下にうずくまっていることさえも浮んで来なかった。ただ混乱し切った平静があるだ

けであった。冷たい土に両手をついたまま，うつむいた目からは，あつい涙がぽたぽたと落ちた」彼女の体は，そのまま動こうともしなかった。がやがて混乱した無感覚の底から，すべてを洗い流した中からひらめくものがあった。大地のひびきを感じた。一瞬大地に接吻したい衝動にかられた。K子はこの時，強い確実さの感覚を以って，自己の存在を識った。「私は生命を持っている」　湿った灰色の土の上に投げ出された孤独な二十二才の肉体が，この時自分の生命をはっきり感じた。「火事だ」「火事だ」あたりはますます騒がしくなっていった。南東の空にはもう真赤な炎がめらめらと見え出して来ていた。

一つのたった一つの姿勢でこの世の中を歩いて来た彼女のうずくまった体だけがあたりの騒音から離れて静かに息づいていた。

1961年6月

オパーリン「地球上の生命の起源」

2回生　竹西壮一郎

生きとし生ける者誰か生命を思わざりけるという訳で入学早々岩波新書を買込んだ。更に進んでオパーリンの「地球上の生命の起源」を買ったのは10月も半ばになってからであった。僕の学問，殊に自然科学についての考えを逆転させる発端はこれであった。僕が純粋に興味にかられて読んだ最初の科学的著作は本書が初めてであったといっても過言ではない。それまでに新書版の入門書といったものは読んでいた。だが教養主義的な考えから無理矢理に読んだ入門書と「生命の起源」とは全く異質のものだった。いわゆる入門書には一定の見地に立って書かれたものは少ない。だがこの本には一定のバックボーンがある。それが進化論である。そしてすばらしい魅力をこの本は持っている。

進化論の上に打樹てられた明快で精緻な理論の展開，それを導出したすばらしい想像力の働き，それらが混然一体となって作り上げている本書の世界は科学的な意味で，壮麗な，輝やかしく，雄大なドラマの世界である。この壮麗さ，輝かしさ，雄大さは目をみはらせるばかりである。若し，科学的に研究が始められたのは極く最近であるというこの生命の起源の問題はまだ確立された理論というものはない。だがオパーリンがこの問題にどれほどの光

を投げかけているかは恐らく僕の想像を絶するのではないかと思う。

不安定な炭化水素とアンモニア、過熱水蒸気などよりなされる有機物の一次的合成，炭素化合物の有機化学的進化，ユアセルヴェート，有機栄養生物という形での生命の出現，光合成生物の出現と進むオパーリンの説をここに書こうとも思わないし，書いたところで本書の魅力がどんなものかと表現することはできそうにもない。読んで初めて本書の意義と魅力がわかる。

僕が科学的ないろの方法，その理論の組立て，科学の曖昧味そして科学にうする想像力の働きをはっきりと教えられた。それは想像していたようなジムサイ、ケチくさいものではなかった。生気と魅力に満ちあふれた輝やかしいものであった。生化学と応用化学のちがいはあるが，化学を一生のものに選んだことを幸福だと思ったのもこの本を読んだ時だった。

科学的真理の追求も詩の世界における真理の追求も共に人間の仕業であり，真理がその名に値するものならば，それが人間に与える影響はなんのちがいもない。そしてオパーリンとゲーテは同一の真理なるものに向って別の道を歩むものにすぎない。少なくとも僕はそう考える。これは大発見である。「朝に道を聞かば，夕べに死すとも可なり」という中国のジイサマの心がやっとわかったような気がした。

詩

街の中でも学校でも
大勢の人があふれている
みんなそれぞれ何かを行う
でもみな私には別の世界の様
私はそれら全部から離れている
私と関係あるものは何があるかしら

（よみびとしらず）

三回生化学工学実験近況

3回生　寺田　英一

繊維化学教室の一階東の突き当りが、我々が現在取組んでいる化学工学実験の本拠、岩崎研究室である。多少野球マニアのきらいはあるが、ファイトある勤勉家の松本先生の適切なる指導と、卒論生のタイムリーな助言のもとに連日はり切って実験に取り組んでいる。岩崎先生も時々顔を出される。美しい女性がおられる影響もあって、研究室の雰囲気は大変なごやかである。時々すごまじいコーラスが聞こえてくることもある。

南側の中庭には、噴水が水しぶきを上げている池の周囲を取りかこむように美しい花段が並んでいる。時にはきれいなお嬢さんが花に水をやっているのに見とれて実験の手を休めることもある。実験のあい間には池の周りに集って雑談に花を咲かせる。恋愛について、人生について、エトセトラ、エトセトラ。

我々のグループは井上修次、井上正、上田、池田、天辰、片瀬、寺田の七人、研究課題はポンプの分解、組立、配管；製図、青写真；乾燥、蒸留、その他、期間は6月1日～30日までではあるが研究課題が多く、また各項目にかなりの時間を要するので、日曜日以外は連日実験をやらねばならず忙しい毎日を過している。

化学工学実験は別名ポンコツ屋といわれるように（少くとも我々の仲間ではそういうことになっている）化学薬品はあまり使用せず、もっぱらドライバーやモンキー等を振り廻す実験がその大部分である。それじゃ頭を使う必要がないから、らくなもんだと思うのは早合点。　実験後のレポートが大変なのである。なにしろ微積分と確率と統計とをmixして濃硫酸をぶっかけたようなやっこしい公式を駆使して結果をまとめるのだから並大抵ではない。我々の前のグループの者が実験終了後1ケ月余り経っているにもかゝわらず、誰れ一人としてレポートを提出していないのを見ても　推して知るべしである。

勤勉なる我がグループは早々にレポートを提出すべく、日夜実験とその整理に励んでいる次第である。

僕の昆虫記

1回生　竹村一郎

私達の周囲には，実に多くの昆虫がいる。花から花へとせわしげに飛び歩くモンシロチョウやアシナガバチ、夏の晩，突然，家の中に飛び込んで来て、私達を驚ろかせる蛾やコガネムシ，上はカブトムシなどのように大きいものから，下はアリ，カなどのように小さなものまで種々様々である。皆さんは，彼らを注意深く観察したことがありますか。彼らの一つ一つの行動は，一般に見逃されがちで，一見，不規則なもののようであるが，よく注意して見ると，驚くべき自然の神秘さによって，定まったものであるのが解って感心させられるのであります。私は昆虫が好きで，特に，蝶に興味をもち，今でも，蝶の採集，飼育を続けていますが，他の昆虫の観察をもよくやります．観察といっても大げさなことは毛頭なく，自分の身のまわりでも，面白い結果が得られるものです。フランスの有名昆虫学者たるアンリ・ファーブルの名著「昆虫記」を私はよく読みましたが，その中に出てくる虫に関してのファーブルの観察がどうしても信じられないほど，小説じみたように思われることがあって私はしばらくこれらを中心に観察しています。以下は，観察の結果の一つです。

◇クモ狩りの名人ーベッコウバチ◇

皆さん方は，ベッコウバチという蜂の一種を虫に興味ある人なら一度は見たり聞いたりしたことがあるでしょう。丁度，五月から七月にかけて，山の崖の斜面や，家の周囲にでも見られ種類も多いようです。山地では，茶色のものが多く，家の近くにいるものは黒色が多いと思われます。ファーブルは、ベッコウバチ（フランス産のスジグロベッコウやサキグロベッコウが対称となっているがベッコウバチ科のものには，ほとんど類似の習性がある。）について，次の如く言っている。『ベッコウバチは、クモ類を餌にしているがこのクモ類というのが，ベッコウバチよりも大きくて，毒あるキバをもっているやっで反対に，ハチの方が餌になりかねないのに，ハチはクモを穴の入口におびき出して，足をくわえて外へ放り出してから，針の注射で麻ヒさせてしまう。ハチは，穴から放り出されたクモが無力なのを知っていて決して穴の中に入って攻撃をしかけない．』というのである。私にはこれがどう

しても信じられなかった。ベッコウバチといえども，そのような方法を使うとは考えられなかったのである。私はこれを一度実験してみようと思ったが、なかなか機会に恵まれなかった。つい最近，私は，私の家の庭に，黒色のオホシロベッコウを見かけて，〝チャンス到来〟とばかりに追跡した。ホウセンカの葉の上を忙がしそうにアチコチ歩きまわっている。触角をふるわせてはまるめたりのばしたりしている。しばらく一時間ばかりそのそばを離れなかった。根気よく待っていると，彼はふっと飛びたつと庭の南の隅にとんでいき草間を歩きまわっていたが気がつくと何か口でひっぱっている。よく見ると，オヤ，それはクモではないか。私の胸はおどった。ただ嬉しかった。今日は運がよいらしい。しばらく引っぱったのち八チは、餌を放して，そこらを歩きまわっている．何か調べているのだろう，放されたクモは死んでいるらしく，横わっている，八チはあたりを念いりに調べ上げた後戻ってきて引っぱり出す。これを何ども何度もくりかへし進んでいくと庭の草花の植え込みの中に入っていく。そしたら草の茎を登り始めて葉の上にクモを置いたかと思うと，何処かへ姿を消してしまった。しばらくそこらを探したが，いないので失望しかけていたとき彼は戻って来たのでホッとした。クモを再び地面に降ろしてどんどん進んでいく。何度も見失ないそうになりながら進んでいった。もちろん，こう言うと長いきよりに思えるが，実際は，せいぜいクモを最初に引きだしてから三メートルほどである。そして，私の机の窓の下に出た。私は，八チの穴が近いと感じたとき，八チは一つの板の下に入っていった。そっと板をめくると果して巣があった。やっと見つけたのである。八チは，穴に入っていきしばらくして巣の入口においたクモを，巣に入れようとした時，クモが動き出したので奴(やつ)さん，一体何をしたと思いますか。彼は，すぐクモの腹部に針の注射を打ったではないか。**将に，ファーブルの**いった通りなのである。それっきり，クモは動かなくなった。ここに今度の観察の半ば目的が達せられたのも同様でした。何となれば，その証拠に，そのクモは，生きていたのですから。即ちクモは，八チの為に針で麻酔をかけられたのです。一度だけクモの穴のそばを通り，クモが出て来たところ，一度で注射によって成功したのは，フランスの八チ，クモの類の相違によるものでしょう。

以上のようにダラダラした拙文になりまして恐縮ですが，文の書き方を知らない奴だなと思ってお許しを願います。虫の真の面白さなどを十分に表現できなかったのは残念です。

現代日本の学生としての問題

1回生　井上　長三

CHAINにのぞむ

前号のCHAINにはきわめて奇妙なくいちがいが，きわめて明瞭にうき出ていたことは誰しも気づかれたことではないだろうか。我々一回生の学友は見事に核心をついた批判を上級生に投げかけていたし，又四回生の方も機関誌の存在意義という題で我々のとるべき本質的態度を原理的に明確に示しておられたのだが一方において，他の上級生の作品の大半はその姿勢においてこれらの提案に全く背を向けたかってわがまゝなものであった。こんなことが続くのなら本誌をいっそのこと学術関係のものだけにしては‥‥とさえ思えた。なるほど中にはそれらの提案に答えようとするかのような内容のものもあった。しかしそれとても結局は下級生を諭すといったようないい加減な態度で問題の主眼をたくみに逸してしまったものであった。それら僕が非難したい姿勢に一般的に言えることは，彼らがなにか今の自分に矛盾と不合理を感じているにもかゝわらず全体の大勢に押されて仕方なくズルズルと今のムードにはまり込んでしまい，その自分を弁護しごまかすのに一生懸命といったものと，初めから厚顔無恥の現実社会出歯と審美的指向，文芸ムードをもてあそんでいるものとがあることである。そしてそこには，今日最も罪深いジャーナリスティックな発想法と，現代の停滞した頽廃的文学に毒された面が見られるのである。せめて勉学にはげんでいる学生ぐらいはこんな文学評論屋のまねなどせず，かえってこんな社会風潮に敢然と反抗するべきであろう。「自分が背負っており自分が感じる問題を広い視野に立って追求し解決しようとする姿勢を自己の思想にまで高め，その思想を学友同志が互いにたゝきつけあうといったようなものが書かれてしかるべきではないか。文学的言いまわしと，随筆的題材をならべたてて，漠然とした問題提起や，ことわざ的余韻をのこしてすましているような態度が一体どんな思想をもたらすだろうか。科学者たるべきものとして恥かしい，思想ならざる思想に違いない。だがこれは今日の日本人の一般的傾向の一面であると思う。今日の日本の社会に対する心がまえにつながる問題である。この小冊子は，我々は現代日本の全学生の一枝であるという認識のもとに真摯な議論が展開されるもの

となってほしい。そして諸先生方も，枯れきった思想の健全さを誇るようなことはせずに，公の場合はともかく学生とともに論じるときぐらいは今の悩める日本の大人の1人としてふさわしい思想を我々の前に出して示してほしい。あの戦争を経てきた大人で，自分は今の青年に対しある行動をとるように要求する資格があるなどと心の底から本気で云えるような人がいたら，僕はそんな人はあの戦争のときに早く死んでしまえばよかったのにと思うだけである。

学生運動について

ある教授が学生運動禁鎮論をぶたれた。あの論は毎年がたれているらしいが僕もきいた。聞いて大変ありがたい気がした。その教授の顔は両親の顔をほうふっとした。あの論は親心とも言うべきものである。しかし親心というものは しばしばエゴイズムであり、大局的見地を忘れ真理を無視した強权的なものである。従って、誠実な理想と真実に生きようとする息子、娘の容易には承服しがたいものである。ところが前号の本誌で，いかにもものわかりのよい、親孝行な長男の意見をきかされたのである。僕はこれから、決して無気力ではない，とキバっておられた長男にその態度を抗議するとともに徹底的に批判したい。

まず、①政治運動のような華やかさはなくて，地味な目立たぬ研究によって将来人類の福祉に役立つことを願うというきわめて平凡なことが大切な心構えであるという見解が頂点におかれていたが，これが重大である。このようなうすっぺらな思想が今日多くの人々に、いかにももっともな大義名分として受け入れられているということが，いかに日本人がこのように無気力で無関心の状態にならざるを得ない状況に追いつめられているかを示しているのである。だいいち，政治運動を「華やかなもの」ときめつけて一方に置き，それに対抗させて地味な研究を人類の福祉に役立てようとする態度を選択するということ自身が現実逃避の最もたるものである。本当に政治に関心があるのなら，今日の日本の状態においては上のようなものはえっ横に並べるべきものでないことはわかりそうなものである。自分の地道な研究がさまたげられることなくすべての人々の役に立つようにと願うならば、政治運動もいっしょにやらねばならないのである，現在の日本の政治权力はこのままかせておいたら，民主主義発展のために国民をみちびき，世界平和に貢献するといった本質のものではないのである。したがって現在の日本の社会は、よけいな口出しをしてさわがなくても、自己の今の位置で最善を尽しておればそれが他人の利害や行為と何ら矛盾せず，平和な統一された民主国家の

明かるい未来に向ってどんどん進んで行くというものでもない。全く反対である。すこし息をぬけばすかさず民主運動をきりくずそうとし，日本帝国主義の復活をもくろむ右翼反動思想を根底にもった政治权力であり、経済的発展によってその勢力が強くなるにつれてその正体をあらわしはじめてきているのである。そしてその社会は複雑錯綜を通りこして矛盾にみちており，自己の転業に忠実であることは必ずしもその社会のためにはならないのであり、かえって自分の努力がとんでもない方面に利用されるということもありうるのである。この複雑な近代社会ともなれば，なにか一本筋をとおしてものごとの判断をしやすくしてくれるのが親切な政治の役目だと思うが，どこをさがしてもそんなものはみつからない。よく調べればしらべるほどなにがなんだかわからなくなる社会であり，本当に良心的で注意深い人なら息もつけないことだろう。しかも帝国主義とか右翼とか言っても彼らには将来のはっきりした見通しとか理想とかいったような立派なものはなく，彼らが互いに勢力争いをしながらも同類のわけまえだけは保っておいてバクチをうち合うといったヤクザ仕事をするためには、社会の状況が一般民衆にあまりよくわからない方がつごうがよいのである。このようにして，善良で気力のある人間が立ち上がるべき時はもうとっくにきているのである。ただ立ち上がるべき時に民衆が立ち上がれなかったから，極圧的な行動というものがとび出してくる可能性があったのである。太平洋戦争以来今まで日本は全くヤクザに押えられてきたと云っても云いすぎではないと思う。あの戦争のやり方と終り方がまさにヤクザ的である。帝国主義のナワバリ争いから一か八かのなぐり込みをかけて，まけると分ったらあっさり降さんしてアメリカの子分になってしまった。思想や信念など紙くずである。アメリカの占領状態という中で日本の民衆は全く立ちあがる力をもたなかった間に再び日本の帝国主義勢力がわやくちゃくとその力をきずいていってしまった。アメリカ依存による経済成長，巨大な警察組織，ついに如何ともしがたい力となった自民党の私兵・自衛隊によって，戦争という代償で民衆が手に入れるべきであった国家の权力は再び完全にヤクザ的权力に帰してしまったのである。これほど不当な政治权力はない。こんな不合理な国家はない。民衆はもっと崇高なものである。経済成長だけで多くの人間を自分の勢力に抱き込んだとおもったらまちがいである。人間は崇高なものであるにもかゝわらず，生きる目的というために，崇高とはなんのかゝわりもない経済の大きな機構の中にはまり込んでいかねばならないのを多くの人間は不満に感じているのだ。この不満を絶望的に感じる人々が，極端な現実妥協的や現実逃避的人間になるのである。

なるほど今の強权の大きさを見るなら，絶望的に見えるかも知れない。しかし世の中には同じ考えや、不満を持った人が多くいるにちがいない。この人達が互いに集まってそこに革新的エネルギーを定着することが出来たら、そしてそれが日本のいたるところで成功するなら，日本はやがて歴史的な社会革命を行いうる大きな希望があらわれてくるだろう。これからの日本の青年は，いい加減な思いつきの言辞で自分をごまかすようなことはせずに、大きな理想を持って日本のいたるところに革命的エネルギーの根をはやすことを任務とするべきである。学生の間は学生運動として表わせるであろうし、その人間がどんな職場に行ってもそこでたえず理想の火をもやしつづけるべきである。それは、一時事が起った時だけさわぎ立てるようなものではなく，しんぼう強く絶えざる地味な活動をつづけてゆくものでなくてはならない。日本の民衆が革命の理想が持てるようになったときこそ、日本がはつらつとして生まれかわるときである。そして日本が完全な社会革命を行いえたときから日本の民衆が本当に自主的な全く新しい歴史を歩むようになるだろう。これを啓蒙とよび，事大主義的英雄主義とよびたい。　では一体自分はどんな考えで行動しようとしているのか示してほしい。

次に自治会のことについてであるが，自治会の活動が低調なことは皆タイコバンを押す。しかも多くのものがまるで人ごとのように云うのである。僕の思うのにこれは一つには、学生委員と一般学生の間が，活動上から見て疎遠であるということと，又学生委員同志もばらばらであるという理由で積極的な意見や活動の提案が出されにくいということにあるのではないだろうか。そうだとすれば、委員と一般学生の間を近づけるものとして、政治における政党のようなものを作ればよいのではないか。少しとっぴかも知れないが僕は、まず自治会を活気づけるという意味から「自治会刷新同盟」なるものを結成することが出来たらどうだろうかと提案する。

「繊維展」をやろう　4回生　荒谷　善夫

今年の四月頃から，本科教職員の方々の間に「繊維展」を開催しようと云う空気があり、我々の方にも，その気が持ちこまれていた。最近このことについて、松本氏に問い正してみると，学生の方さえ，やる気なら、教職員の方も出来る限りの協力をするということであった。開催の時期については，本年秋の学園祭の頃，即ち，11月初旬が好適だと云うことであった。「繊維展」と云っても，我々四回生も未だ一度もその機会に恵まれていない。話に

よると，四年に一度行う予定だったそうである。そこで，「繊維展」とは，どんなものか，昭和32年12月20日発行の「衣笠学校」から，その様子をピックアップしこれに，次の様に記されている。

本学部繊維化学教室の新築竣工を記念して5月31日より6月2日まで3日間繊維展が開催された。31日の午前は竣工記念の式典が盛大に催され，午后は「繊維と高分子の化学」と題して，京大教授桜田一郎博士の講演及び「最近化学繊維の発達」と題して，東洋レーヨン相談役種村功太郎博士の講演が行なわれた。6月1日及び2日には映画会があり，その主なものには，「ナイロンの花咲く」「ナイロンの上手な使い方」「原子力の平和利用」等連日満員の盛況で賑わった。このほか学内には，化繊館，生糸館，繊物館，紡績館，養蚕館，蚕病館，即売館等があって，3日間に亘り展示，実演及び即売が行なわれた。会期中の参観者約6000人，各種団体も多数あって，係員もうれしい悲鳴を上げた。

以上がその概略であった。次に具体的な内容について少しふれよう。

第1会場　繊維（化繊，合繊）に関する種々の統計
　　レーヨンの出来るまで
第2会場　種々の合繊の展示，及び主な生産会社の写真集
第3会場　各種プラスチック人の展示
第4会場　各種染料と油剤の展示
第5会場　ベックマン光度計，光電比色計，螢光分析計，高周波測定器
　　ペーハーメーター，電位差計，ポーラログラフィー，旋光計
　　表面張力計等の精密器械室
第6会場　繊維の鑑別場
第7会場　電子顕微鏡室
第8会場　樹脂加工実験室，　フロック加工の実演など．
第9会場　ボビン式レーヨン紡糸機及びポット式スフ紡糸機による紡糸
　　の実演。　原液着色も行う。
第10会場　ナイロンの熔融紡糸機による紡糸
第11会場　ポリエステル樹脂の成型実験

以上が四年前に行なわれた「繊維展」の内容であった。我々が今秋開催するとしたら，今後その内容について考えて行かねばならないが，一応参考の為上に示したのである。この四年間に科学技術の進歩は著しいものがあったから，その内容も大きく改変され，非常に豊かなものとすることが可能である。

この様な問題は、本学科全体の一致団結した協力なしには、充分に成果をあげられないだろう。もし開催するということになれば、出来るだけ早く、実行委員会に然るべきものを作り、初期の準備を着々と進め、前期の試験が終った頃から、全員で本格的に準備すればよいのではないかと思う。
以上の様に思うが、如何がなものであろう。

無題

1回生　斎藤　博

僕はある人々の考えるように自然を絶対的なものとは考えない。どちらかと云えば観念論的な考えを持っていると云える。だが今の僕には判らない事ばかりが多く偉そうに云う事は何もない。大学に入って哲学の講義の聞ける事を期待していたが昔の哲学者の云っている事が自分の思っている事に何の解決も指導も与えない様に思えて大いに期待はずれである。しかも物の考え方がこう云う方面にも在りあゝ云う方面にもあるという風に考え方を示してくれるだけで十分興味を持てると思っている事も確かである。ヘーゲルについて習っているのだが、彼の哲学には二つの立場があって総て事物を発展変化過程の中に観察し死んだ不動のものとして物事をみるのでないという弁証法と悠久の昔から存在して来た絶対精神というものがあってそれが色々の自然現象を生み出し社会における色々の歴史的事件を生んで行くのだという見方をする観念論だそうだが、哲学を未だよく知らないから、そんな事は知らん。知らないけれど聞いたり読んだりする所からして先に云った様に自然或は物質を絶対的と見るような唯物的な考えは抱きえない。又哲学と宗教がどこで接触しているのか理解しかねる。哲学の授業だから哲学者達のあのあじけない宗教が語られるのだろうが、宗教を中心にした場合あんなものではないと思う。

世の人々特に若い人達には神の奇蹟などとうてい信じられないと思う。しかしそれは、それでいい。常識的理論的に言って水がブドウ酒に成ったりはしないし病人が直ちにいやされるということもなかろう。こう云う理由をもって神の奇蹟は信じられないと言う人は合理性を追求し、「数」と云うものの支配する分野のみで成長して来た人であって、狭い意味での教養を身につけて来た人だと云われて仕方がないのではないだろうか。数の世界を学んだ

人によって為される判断は成程合理的であろう。しかしその人々は例えば次のような事をどう説明するだろう。即ち火事がおさまった後焼け死んだ母親がかばっていた子供が生きていたという場合の母親の愛を合理的理論的にどう説明をつけるだろう。「それは母親の本能だ、そう言う例は象の場合にもあるんだよ」、という人が必ずいる。しかし人間の場合母親とて意志有る考える動物であるから動物とは一緒に成らず何か異なるもの即ち人間としての大きな愛があると見なければならないという事は即ち「数」の支配する分野をもって神の奇跡を論ずる事は哲学の先生の言葉で言えば次元の異なる事である。だからただ理論的な分野に於ける言葉だけで神の奇跡を否定してもそれはその人を得意にさせるだけであって「奇跡」なるものの影を蹴っているにも当らないのである。

又人は誰しも愛の存在を認めるであろう。母や父が自分を愛している事は、それが何かの表現なり表現された結果として吾々に感ぜられるから愛が在るのだと知るのである。しかし認めているもの自体は実に抽象的なつかみどころのないものである。それを直観する事によって吾々はその存在を疑わない。しかるに信仰というものも同様に直観的なものである。クリスチャンの信仰の基礎と成るものは前に述べた愛である。この直観的な愛を認める多くの人々が同様に直観的な愛を基とする宗教を信仰する人々を自分達とは別の世界の人のように思ったりするのはおかしい。愛をはじめとして理論的に割切れないものがこの世には沢山ある。だから吾々はいろいろな世界に生きている事を知らねばならない。従って信仰というものは吾々の数学的な合理性を尊ぶ理論或は常識では考えられない所にあると思う。だから僕は神の愛を信ずると共に神の奇蹟を信ずるのである。今迄これに対する多くの批難もあびたが「それでもやはり俺は神を信ずる」という心が持ち続けられて来たのは、批難する人の言葉自体が他の世界のものであったのである。

精神的な努力に反して、若い体の持ち主である自分は自分でもいやになるような事をする場合が多い。こんな自分を二重人格者とも言いたくないし、幅の広い生活をする者だなどとおこがましい事も言いたくない。自分と云うものがはっきりつかめなくても、あとで反省出来るだけでもまだましだと思っている。人に出来て自分に出来ぬ事は多いしかし、人に出来なくても自分には出来る事もあるだろうと考えて、「まあ俺も捨てたもんじゃない」位に思っておかねば、息をするのも苦しくなる。又そう考えているのが現在の自分である。

一冊のCHAINができるまで

原稿を集める

↓

（相当手間がかかる）

現定の用紙以外の紙に書いたもの、及び読みにくいものは、編集委員が各自分担して、規定の用紙に書き直してくる。

書き直しを必要とするものは、全体の過半数である。

↓

各編集委員はすべての原稿に一応目を通しておく。

編集委員会：普通、集った原稿を全てのせている。

- 先ず大まかな配列を決める。
- 細部にわたっては、題字の位置やあいとか、頁数に無駄がなくなるように、配列順序を決める。

夜遅くまでかかる。

↓

印刷屋へ出す

↓

校　　正 → 印刷 → 出来上り

出来てきた原紙と原稿を照らして校正する。未熟故、相当のミスも残る。

印刷代などにいった金を集めるが、ずい分苦労する。（皆様の協力しだい）

CHAIN原稿の書き方

現定の用紙を用いる。この用紙の最初の6行を題字と氏名につかう。本文は7行目より。この現定の用紙（34×34）を使うか、或はそれに準じてもらうと、編集に先だつての書き直しの手間がはぶける。

なお現定用紙（34×34）一枚で本の一頁となる。

※現定用紙は編集委員のところにあります。

編集後記

山道を歩いている時，何時間か経って，道標を見た時ほどうれしい時はない。道標は，山のピークを征服すると云う大目的を達成する場合の一つの過程での成果である。我々のCHAINも，ここに8番目の道標を見出した。しかし道標はあくまで道標である。過程での一応の成果である。まだまだ，山道は続いている。仮に，登山を人生の道にたとえるなら，学生々活は道標から道標への過程であろう。この過程の道からの眺めは色々豊かなものを含んでいる。この様な豊かなものを我々は学生々活の場で示したいものである。若者の喜怒哀楽で満ちたCHAINを作りたいものである。そして欲を云えば，学術的にも価値あるものとしたい。その試みとして，各研究室毎の雑誌会なども，CHAIN誌上で，大きく広げて行きたい。一，二回生への高分子の紹介なども行いたい。そして，文化的なもの，科学的なものその他あらゆるものを含めた集合として，学園のエネルギーとなれば幸いである。先生方のご協力もますます期待したい。
次号は九月下旬に発行する予定です。どしどし原稿をお願い致します。なお本号の表紙の図案は，四回生片山君のものです。他にも色々ありましたが，次の機会に譲りたいと思います。

発行日　1961年7月6日
発行者　京都工芸繊維大学繊維化学科学生
印　刷　北斗プリント社　Tel(7) 0231
編　集　繊維化学科学生機関誌編集部
編集代表　荒谷善夫